

医学部ウォーカー

1面：ヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム開催／医学研究科長・医学部長寄稿 2面：教授就任のご挨拶／教育に携わった業績を上げた教員表彰 3面～5面：各賞受賞 6面：弘前大学白菊会50周年記念講演開催／学内：学外公開講座 7面：スクーリング開催／災害医療フォーラムin東京開催 8面：外科手術体験セミナー開催高校から／動物慰霊祭／若手教員・医師だより 9面：前期研究室研修優秀発表賞／10面：学生だより 11面：総合文化祭医学展を終えて／北日本懇親野球大会参加報告と御礼 12面～14面：留学だより（テネシー大学・三沢空軍病院）／青森あずまし温泉紀行 15面：部活動紹介研究室紹介 水泳部、山岳部、グリーン・キャンパス・クラブ 16面：形成外科学講座、臨床検査医学講座 17面：K-1カレッジに出場して／テレビ出演して 18面：医師専用サイトがんと魅せ技に出演して／人事異動

題字 前弘前大学長 遠藤正彦氏筆

平成28年度

弘前大学COIヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム(東京)開催

副理事(研究担当)／COI研究推進機構

機構長補佐(戦略統括)・教授 村下公一



開会挨拶 佐藤学長



三村知事



来賓挨拶 土屋顧問



基調講演 中路研究リーダー



パネルディスカッション

平成二十八年九月二十三日(金) 弘前大学と青森県、弘前市が主催となって「弘前大学COIヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム」を、千代田区で開催いたしました。本フォーラムでは、二〇一三年に国のセンター・オブ・イノベーション(COI)STRIDEAMに採択され、今秋の中間評価で医療健康分野唯一の最高評価Sを獲得した弘前大学COIが、参画する産学官金民のトップリーダーと一堂に会し、成果実績や今後の展望について発表・討論を行いました。

短命県返上実現と寿命革命を最終ゴールに行っている健康づくりの取組みや研究は、各界で大きな話題となっており、当日は有名企業や研究機関を中心に、市民、マスコミも含めて全国各地から約七百名が来場しました。事前申込の段階で満席となっていました。見ても参加されたい方が多数押しかけ、本学への期待の高さが感じられました。プログラムのスタートは、弘前大学 佐藤学長、青森県 三村知事、弘前市 葛西市長の開催挨拶、(国研)科学技術振興機構 浜口理事より共催挨拶、文部科学省 土屋顧問(前事務次官)とCOI STRIDEAMビジョナリー 松田ビジョナリー(前協和発酵キリン社長)、COI STRIDEAMガバナング委員会 小宮山委員長(東京大学第二十八代総長)から来賓挨拶を頂戴しました。

基調講演では、本学COI 中路副機構長が「市民と巻き起こす真のイノベーション」と題してご登壇。新しい健診の開発にもふれ、後日マスコミで大きく紹介されました。九州大学大学院医学研究科 清原名誉教授のご講演では、ビッグデータ解析から認知症の予防手段を開発したいと発表されました。楽天(株) 濱野氏と著名な料理研究家 浜内氏から今年度実施した健康レシピコンテストのご報告を行い、減塩には国を挙げての取り組みが必要、と言及されま



会場の様子

した。(株)ベネッセHD 西村部長は通信教育で養った知見を本学COIの健康教育に活用することを発表されました。イオンリテール(株) 梅本特別顧問は、モールウォーキングなど店舗を活用した健康づくりが街づくりにつながることを発表しました。続いて「ビッグデータ研究最前線」と題し、この四月に結成された弘前大学COIビッグデータ解析チームがご登壇。本学医学研究科(社会医学講座)の高橋准教授、京都大学大学院医学系研究科の奥野教授、東京大学医学研究所の井元教授、東京大学大学院医学系研究科の松山教授、名古屋大学医学部附属病院の平川講師が、岩木健康増進プロジェクトで得た健康ビッグデータは世界的にも非常



本フォーラムのポスター

今回はややショッキングなテーマを上げました。というのも平成二十七年四月に入学した一年生のうち二十数名が留年したからです。私自身、学務委員長を



医学研究科長 若林孝一

留年の背景にあるもの

医学研究科長 若林孝一

四年務め、留年した全員の学生と面談を行ってきました。そのような中から見えてきたことやデータをもとに留年の背景にあるものを整理してみたいと思います。

まず留年の原因は三つに分類されると思います。第一は、下位の十%に入らなければ留年しないだろうという安心感、クラブの先輩などからの甘い言葉を信じ、力を十分に発揮していないことによるものです。この

タイプは、しっかりと勉強を行うよう指導すること、その後は留年することなく進級してゆきます。第二は、授業への出席が悪かったり、遅刻したり、レポートの提出期限が守れないことによるものです。ただ怠けているだけのようには見えませんが、根本にあるのは自己管理が十分にできていないということです。このタイプには生活面の指導

に希少価値が高いと述べ、解析進捗を発表。大きな注目を集めました。そして本学COIの参画機関(ライオン、花王、エーザイ、カゴメ、テクノスルガ、マルマンコンピュータサイバースなど)が、社会実装や共同研究について発表。さらに、住民による健康づくりの代表的な事例として、弘前市健康増進リーダー 八木橋会長からご報告いただきました。

最後に、弘前大学の柏倉副学長から閉会挨拶を頂戴して本フォーラムは大盛況のうちに幕を閉じました。さて、弘前大学COIがこのように産学官金民の強固な連携を得て、最先端の研究や取り組みを実行・推進

進させていただいているのも、弘前大学医学部をはじめとした諸先生方が築かれてきた多大なる御功績や知見があつてこそのもので日々実感・感謝しております。弘前大学発の真のイノベーション創出へ向けて、社会実装の取り組みを加速させていく所存ですので、今後とも御指導・御支援を賜りますようお願い申し上げます。



ビッグデータ解析チーム

（前ページより）
も含め対処することが重要であり、特定の教員がメンターとなり定期的に面談したり、研究室に机を設け、そこに出入りすることで社会人としてのマナーや自らを律する態度を身につけてゆくことが必要です。第三は、成績不振の背景に、精神的・身体的疾患、種々の悩み、家族の問題などが隠れている場合です。この場合には、医療機関への受診も含め個別の対応が必要であり、問題解決に時間がかかる場合も少なくありません。現在、医学科では少数人数グループ担任制がありますが、早く気づいてやることで第一歩となります。

それでは全国的にはどうなのでしょう。平成二十八年一月に全国医学部長病院長会議が出した「医学生」の学力に関するアンケート調査結果報告書によれば、医学部医学科の入学定員は平成十九年度の七六五二名から平成二十八年度には九二三四名となっています。つまり、平成二十年度から始まった医学部定員増により一五八二名が増加したことになり、以前の規模で言えば新設医大が十六できたことに相当する数です。さらに、定員増を補正した留年率でみると、一年生の留年率は定員増以前に比べ一・七四倍に増えており、二年生の留年率も一・二六倍となっています。一方、三年生の留年率は以前と変化ありませんが、四年生の留年率は一・一七倍となっています。一年生、二年生の留年率の高さは医学部定員増を反映したものかもしれませんが、四年生の留年率の上昇はCBTの合格ラインが全国的に統一されたこと

教授就任に際してのご挨拶

産科婦人科学講座 教授 横山 良仁



平成二十八年八月一日付で弘前大学教授教育研究院医学系（産科婦人科学講座教授）を拝命いたしました。早速その当日弘前大学ねぶた運行に参加させていただきました。就任にあたり自己紹介を兼ねてご挨拶を申し上げます。

私は宮城県丸森町で育ちました。仙台市と福島市まで車で一時間ほどの宮城県の最南に位置する盆地町です。町の中央を阿武隈川が流れ、阿武隈ライン船下りがあり、舟運で栄えた町です。山間の町です。猪料理が有名ですが食したことはありません。地元のことにはあまり関心がない。県立角田高等学校を卒業後、昭和五十七年に弘前大学医学部に入学しました。故郷では十八年間、その後約三十五年は津軽地区で生活し、臨床実習の期間を確保するために、四年生のカリキュラムが圧縮されていることもあったかもしれません。

当たり前のことですが、教育の場は授業だけではありません。学生を見守り、異変に早く気づき、適切な対処ができるよう、教員各位の目配りを宜しくお願いいたします。

三回弘前大学医学部学術特別賞を受賞しました。継続した研究によってカルボニル還元酵素DNAが卵巣癌の遺伝子治療に応用可能なところまでできました。婦人科腫瘍グループの後輩たちがバトンを繋ぐように行ってきた研究が花開こうとしています。



この度、『平成二十八年度教育に関して優れた業績を上げた教員表彰』受賞の栄誉を賜りました。医学研究科の皆さまをはじめ関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

自分がこのような表彰を受けるとは思ってもみませんでしたので、本稿を書くにあたり受賞の経緯をお教えいただきました。学生による授業評価が高得点であった教員の中から他の教育活動も含めて評価され選出されたということでした。私の講義に高い点数をつけてくれた学生さんに感謝しております。初めて講義を担当することになったとき、それまで担当されていた福田教授（現病院長）からパワーポイントを頂戴し、「学問として高度であることより、大事なことを覚えさせるように」とご指導いただきました。そのことを念頭に、内科・消化器領域を専門としない医師になる学生には、私の講義が彼らにとって最後に教わる食道・胃疾患の知識になる可能性があることを考えて、毎年講義

入局者を増やして、大学院生を増やして、質の高い医師を育て数年後にはより安定した地域医療を達成させたい、こう思い描いておられます。まだまだ慣れない教授職ですが、みなさまからのご指導・鞭撻をいただきましたら幸いです。

と、確かに。指導医の自分の仕事に対する真摯さ、データ解析能力、論文の指導力など若手医師は指導医を模範として、リサーチマインドを熟成させていくものだと考えています。私たち指導医の立場としては、ますます精進して若手の見本となるような仕事をしていかなければと思っています。



指導した後輩が学位を取得した時、学会での発表が表彰されたときはとくに喜びを感じます。

さらに、指導する立場のほかに制度の仕事もあります。現在、附属病院では、卒業臨床研修センター運営委員、初期研修プログラムBの責任者であり、内科専門医研修プログラムの作成にも携わっています。また、学外でも福田病院長に消化器病学会の専門医カリキュラム作成委員に推薦していただいていた以来、専門医制度の仕事に携わってきました。現在は同学会の新専門医制度ワーキンググループ委員、日本内科学会の専門医専攻プログラム審査などを務めています。弘前大学医学部での専門医制度の仕事は、附属病院で研修する後輩医

師の役に立つようにと思っています。

今回、教育について表彰していただきましたが、平成二十二年には医学部学術賞特別賞をいただきました。大学院の教員として、研究と教育の二分野で高い評価をいただいたことは、大変光栄です。医学部卒業時に母校に残って頑張ろうと決めて、その気持ちのままここまでできました。表彰いただいたことで、少しばかりそれができたのかなという気持ちです。卒業後第一内科に進んで以来、二十五年に渡ってご指導いただき、現在も私に仕事の場をくださる福田病院長に深く感謝いたします。弘前大学医学部のために今後も微力を尽くしていく所存です。

教育に関して優れた業績を上げた教員

第49回 日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会

優秀ポスター賞受賞報告

整形外科学講座 助教 大鹿 周 佐



学会長である順天堂大学整形外科の金子教授(中央)と私(一番右)を含めた受賞者4名

このたび、二〇一六年七月十四日から十五日に東京ドームホテルで行われた第四十九回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたので御報告申し上げます。この賞は、優秀ポスター賞応募者の中から、抄録査読において二十二演題が候補として

ノミネートされ、学会当日に審査員の先生方がポスターの内容を評価・点数化し四名が受賞されるものです。私以外の二十一演題は、症例数豊富な大規模調査、遺伝子を解析した臨床的・基礎的研究、工学的手法を応用した研究などアカデミックな内容ばかりで、とうてい私の地味な発表は選ばれないだろうと考えておりましたので、受賞を知ったときは本当に驚きました。

私の演題名は、「人工補

填材を用いてnon-rigidな胸壁再建を行った骨・軟部肉腫の治療成績」です。骨性胸郭の切除後に、人工補填材(e-PTFE patchやMarlex meshを使用)を用いてnon-rigidな胸壁再建を行った肉腫症



発表ポスター前で

存率は六〇・四%であり、過去の報告と同等でした。単変量解析による予後因子の検討では、腫瘍径が大きいと局所再発や遠隔転移に

繋がりが予後不良となることが示唆されました。最終的に、人工補填材を用いたnon-rigidな胸壁再建術は有用な方法であると結論しました。

先輩方の素晴らしい治療成績があつてこそその受賞であり、本発表の機会を得ましたことを誠に光栄に存じます。今後も、医療の進歩

に繋がる診療と研究を心掛けて、日々精進していきたいと思ひます。最後になりますが、石橋恭之教授や柳澤道朗准教授、そして統計解析やポスター作成に熱心に協力してくれた後輩の千葉大輔先生、その他多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

第64回 日本心臓病学会若手症例 presenter賞 最優秀賞を受賞して

循環器腎臓内科学講座 助教 西崎 史 恵

今回私は、第六十四回日本心臓病学会若手症例 presenter賞 不整脈・非侵襲的画像診断部門で最優秀賞をいただきましたので報告致します。

タイトルは、「致死性不整脈を合併した冠攣縮性狭心症に対する着用型除細動器の有用性についての検討」です。着用型自動除細動器(WCD)は、近年本邦で使用可能となった新しいデバイスです。除細動器を搭載したベ

ストを着用することにより、周囲に誰もいない状況下で心室細動や持続性心室頻拍などの致死的不整脈が生じた際にも救命が可能となりました。致死性不整脈の既往がある患者には、従来から二次予防として植込み型除細動器(ICD)が適応となつて

いましたが、ICD植込み手術までの待機期間や薬物治療の効果判定までの一定期間WCDを装着することで、突然死のリスク軽減や不必要なICD植込みの回避が報告されています。冠攣縮性狭心症は、致死性不整脈をしばしば合併しますが、二次予防としてのICD植込みの適応については未だ明らかではありません。カルシウム拮抗薬内服により冠攣縮の抑制が期待

されますが、その薬効評価までの間は突然死のリスクを伴います。そこで我々は、致死性不整脈を合併した冠攣縮性狭心症例に対し、カルシウム拮抗薬内服開始と同時に、薬効評価の期間中WCDを使用することによりICD植込みを回避できた三症例の経験を紹介しました。致死性不整脈を合併した冠攣縮性狭心症例に対してWCDを使用した報告はこれまでになく、学会の先生方からも非常に高い評価をいただきました。

今回の発表に際し、様々な最新知見に触れ自分の知識も深まったことに加え、さらなる検討に向け多くの先生方からご意見を伺うことができ、とても良い経験となりました。このような貴重な賞をいただいたのは、発表の機会を与えてくださった指導賜った先生方のおかげです。本当にありがとうございます。今後も頑張っていきたいと思ひます。またこのような掲載の機会を与えてくださった医学部ウォーカー編集部の方々に深く感謝申し上げます。

APSR Abstract Awardを受賞して

附属病院 呼吸器内科 助教 糸賀 正道

二〇一六年五月十三日から十八日にアメリカ・サンフランシスコで行われた、American Thoracic Society 2016 International Conferenceにおいて、APSR-ISR Sessionで APSR Abstract Awardを受賞する事ができましたので、御報告させていただきます。

「The group which elevated exhaled nitric oxide exists in normal population.」という演題にて受賞いたしました。簡単ではありますが、概略を紹介したいと思います。

短命県返上を目的に弘前市岩木地区において、本学医学部社会医学講座を中心として岩木健康増進プロジェクトが行われております。多項目にわたる問診・血液検査・運動能力・肺機能など幅広い調査研究を行っており、我々はこのプロジェクトに参加し、住民検診における呼気NOの検討を行いました。

この呼気NOとは、気道炎症にて有用な指標となりうる可能性があると考えられているものです。特に気管支喘息では炎症性サイトカインなどにより誘導型NO合成酵素が誘導され、呼気NOが健康人に比べ高値である事は知られています。しかし、我々は以前本学学生における呼気NOの検討に

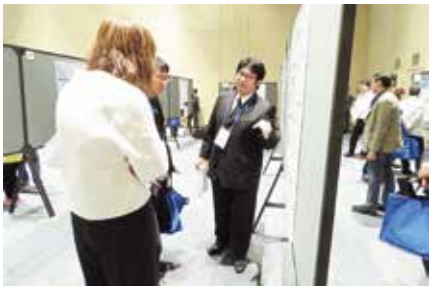
て、高値を示す健康者が存在することを経験しました。呼気NOが変動する疾患以外の原因として、食事・歯磨き・ストレスなど様々な影響が報告されていますが、これらの原因と高値を示す健康者との関連は分かっていないのが現状です。

今回二〇一四年の一年間のデータを解析し、呼気NOと血液検査や肺機能検査など様々なデータと比較検討を行いました。その結果として喘息などアレルギー既往のない住民群において呼気NOのヒストグラムを作成すると二峰性になる事を示しました。また、この住民群では呼気NOは末梢血好酸球数・血清IgEと有意な正の相関を示しました。



受賞者全員にて記念撮影 (左上から4番目が私)

最後に受賞にあたり、本研究の御指導頂きました、弘前大学保健管理センターの高梨信吾教授、呼吸器内科学講座の田坂定智教授、また同講座の當麻景章講師、田中佳人助教、田中寿志助教には深く感謝申し上げます。また、岩木健康増進プロジェクトの research leaderである社会医学講座の中路重之教授にはこのようなチャンスを頂き厚く感謝申し上げます。



プレゼン風景

The 13th Korea-Japan Joint Symposium on Helicobacter Infection

Young Investigator Awardを受賞して

消化器血液内科・血液内科・膠原病内科 助手 中 川 悟

二〇一六年六月二十五日に大分県別府市で開催されたThe 13th Korea-Japan Joint Symposium on Helicobacter Infectionにおいて、Young Investigator Awardを受賞致しました。ヘリコバクター学会の韓日シンポジウムは、韓日が隔年で主催し、毎年開催されているもので、今年は第二十二回日本ヘリコバクター学会学術集会と併せて開催されました。今回このような素晴らしい賞を頂き大変光栄に思っております。この場をお借りして受賞の報告と内容について紹介させていただきます。

受賞した演題は、「Efficacy of triple therapy of vonoprazan, amoxicillin and sitafloxacin as the third-line regimen for Helicobacter pylori eradication in Japan」です。薬剤耐性株の増加な



どにより、日本でもH. pylori感染に対する一次除菌・二次除菌治療の成功率が低下しています。二〇一五年から登場したボノプラザン（商品名：タケキャブ）はこれまでのPPIと比較して強い酸抑制効果があり、一次除菌治療のPPIをボノプラザンに代えると除菌率が高くなることが示されています。二次除菌まで失敗した後は、保険適応外ですが、三次除菌治療としてプロトンポンプ阻害薬（PPI）＋アモキシシリン（AMOX）＋シタフロキサシン（STFX）の三剤が用いられることがありますが、PPIに代えてボノプラザンを使用した場合の除菌率の変化について今回検討しました。結果は、ボノプラザン＋AMOX＋STFXの除菌率が八七・五％、PPI＋AMOX＋STFXの除菌率が七〇・〇％でした。有意差はなかったものの、ボノプラザンは三次除菌治療でも有効でした。ボノプラザンを使用しても除菌に失敗した人では、H. pyloriがSTFXに耐性を持っており、これが除菌失敗の原因と考えられました。



（左）横山良仁教授と（右）當麻絢子先生

九月十七日、十八日に札幌にて第六十四回北日本産科婦人科学会学術講演会が行われました。この学会は北海道、東北、北陸の十五大学とその関連病院の産婦人科医達が基礎から臨床にわたる演題を発表し、議論を行う場です。今回は百四十四の演題から優秀演題賞の一つに選んでいただきました。

演題の内容は「精液を用いた子宮内膜NK細胞刺激法についての検討」というものです。原因不明の不妊症にはNK細胞の異常が関わっている可能性があると言われているため、一般的に検査の際にはNK細胞を試薬で刺激し、産生されるサイトカインを測定しています。しかし薬品での刺激は人為的で生理的な産生を反映しているとは言い難いため、妊娠成立時に必ず接触のある精液を用いることで、より生理的かつカプセル特異的な検査法となり得るのではないかと考えました。そこで当院倫理委員会承認のもと患者の同意を得て子宮内膜を採取し、精液による刺激と薬品（PMA・イオノマイシン）による刺激でNK細胞（CD56⁺細胞）にお

けるサイトカイン産生（TNF- α 、IL-4、IL-10）に差が生じるのかどうか比較しました。精液刺激によるIL-17 γ （p<0.05）及びTNF- α （p<0.01）産生CD56bright細胞の割合は未刺激に比して有意に高く、刺激に比して有意に低かった（いずれもp<0.01）。またIL-4及びIL-10産生CD56bright細胞の割合は精液刺激で最も高値であった（p<0.05）。さらにNK1/NK2比は精液刺激で薬物刺激に比して有意に低値でした（p<0.05）。また同一子宮内膜を異なる精液で刺激すると、IL-17 γ 及びTNF- α 産生NK細胞の割合に差を認めました（IL-17 γ : 2.60%、TNF- α : 2.50%）。以上の結果より精液による刺激でNK細胞のサイトカイン産生が誘起されることとが示され、さらに子宮内膜と精液の組み合わせによりサイトカイン産生に差が生じることから、子宮内膜と精液との間にカプセル特異性がある可能性が示唆されました。同様の検討は海外文献を検索しても類を見ないため様々な予備実験を要しましたが、研究室研修で配属された学生の方々に

最後になりますが、ご指導いただきました福田眞作教授、下山克准教授をはじめ、教室の諸先生方に深く御礼を申し上げます。今回の発表を通し大変貴重な経験をさせて頂きました。これを励みに日常の臨床や研究に邁進していききたいと思います。

第64回 北日本産科婦人科学会学術講演会
若手優秀演題賞を受賞して

大館市立総合病院 産婦人科 當 麻 絢 子

平成二十八年七月九日に日本消化器内視鏡学会東北支部例会が開催されました。その中のレナリーセッションにて症例発表を行い、優秀演題賞を頂きましたので、ご報告させていただきます。また受賞にあたり、ご指導いただいた諸先生方には心からお礼申し上げます。プレナリーセッションは「めざせ！消化器内視鏡専門医」をテーマとして消化器内視鏡学会の企画の一つとして行われており、今回が第九回目です。対象が消化器内視鏡専門医を目指す若手医師となっており、卒業二年目までの研修医と卒業三専攻医・専修医が参加しています。

受賞した演題は「Peutz-Jeghers 症候群の早期胃癌に對し、内視鏡的粘膜炎下層剥離術（ESD）で治療切除を得た一例」です。Peutz-Jeghers 症候群は、常染色体優性遺伝の遺伝形式をとる食道以外の全消化管に多発する過誤腫性ポリープを生じる疾患で、ポリープの増大に伴い、前期合併症として腹痛、血便、腸重積や後期合併症としてPeutz-Jeghers type polyp から悪性腫瘍の発生、また、そのほかの上皮性悪性腫瘍（脾臓、乳腺および卵巣癌など）が問題となります。

腸重積、悪性腫瘍に對し、外科的な腫瘍切除を繰り返すと、短腸症候群となる可能性があります。今後内視鏡検査を行う際、癒着により深部挿入が困難となり、評価・治療が困難となる可能性があるため、できる限り腫瘍は内視鏡治療を行うことが原則となっています。

Peutz-Jeghers type polyp から癌化した胃腫瘍に對し外科的切除、内視鏡的粘膜炎下層剥離術（EMR）を施行した報告は散見しますが、医

学中央雑誌でESDを施行した症例は見られず、本症例が初の報告となりました。EMRと異なりESDはより出血のリスクが少なく、大きな病変を切除することが可能なため、消化管温存の観点からも積極的に行う必要があると考えられました。

最後に、多くの先生方にご指導頂いたお力添えがあって、このような賞を受賞することができました。診断から治療、そして発表に至るまで、自分自身の力だけでは決してできませんでした。今後も謙虚な気持ちでこれからも精進していきたいと思



日本消化器内視鏡学会東北支部例会
プレナリーセッションで優秀演題賞を受賞して

附属病院 消化器内科、血液内科、膠原病内科 医員 澤 田 洋 平

日本臨床化学会で Young Investigators Awardを受賞して

附属病院 医療技術部検査部門 小笠原 脩

この度、第二十七回日本臨床化学会東北支部総会、第四十八回日本臨床検査医学会東北支部総会（合同開催）におきましてYoung Investigators Awardを受賞し、二〇一六年十二月二日から四日に熊本市で行われた第五十六回日本臨床化学会年次学術集会にて受賞講演を行いましたのでご報告させていただきます。

今回受賞したテーマは「赤血球溶出ケモカイン測定による赤血球血液製剤の品質評価」です。概略をご紹介します。輸血用血液製剤に関する副作用は年間約〇・〇三%で発生しています。副作用の種類としてはABO血液型の型違い輸血などの場合に起こる溶血性副作用、細菌やウイルスが混入した血液製剤を使用したことによる感染症など様々ですが最も発生頻度の高いのは非溶血性輸血副作用です（輸血副作用の九三・四%を占める）。非溶血性輸血副作用には、一過性の発熱や蕁麻疹、アレルギー様反応、血圧低下、呼吸困難、輸血関連性肺障害



カーは上昇し、血液製剤の保存期間との関連が示唆さ

平成28年度 糖尿病性神経障害を考える会

Student Investigator Awardを受賞して

医学部医学科五年 石山 永美

平成二十八年九月四日に行われた平成二十八年年度糖尿病性神経障害を考える会において、Student Investigator Awardを頂きましたのでご報告させていただきます。糖尿病性神経障害を考える会は平成七年に設立され、これまで二十回の研究会が開催されてきました。本会の活動により、「糖尿病性多発神経障害の簡易診断基準」および「糖尿病性多発神経障害の病期分類」が提案され、これらは日常の診療現場および臨床研究に汎用されており、糖尿病性神経障害診療の発展に大きな貢献を果たしてきております。このように歴史ある研究会で、賞を頂いたことを大変光栄に思います。

今回、私は「糖尿病性神経障害におけるマクロファージ浸潤の役割について」という演題で、マクロファージが末梢神経のシュワン細胞に与える影響について培養実験を行い、検討した結果を報告させていただきました。糖尿病状態では末梢神経に単球が浸潤し、M1マクロファージに分化することが分かりました。そして、このM1マクロファージから放出される

れました。今後は輸血副作用が起きた血液製剤での検討も行いたいと考えています。今回の受賞は、ご指導をいただきました高見秀樹教授、萱場広之教授をはじめ、臨床検査医学講座、医療技術部検査部門および輸血部



私は四年次の研究室研修で分子病態病理学講座に配属となり、本研究に携わりました。RT-PCRとWestern blotting、細胞培養など、どれも初めての経験であり、最初は思うように実験が進まず苦労した時期もありました。しかし、研究室研修の期間が終了した後も引き続き実験を続け、今

秋季学位記授与式

学事委員長 廣田 和美
(麻酔科学講座 教授)

すべて査読制のある雑誌に採択されていることが義務づけられた結果、なかなか論文が採択されず、四年生として留年する学生が増加したことです。現在二十五名が留年しております。この制度が始まる前の平成十六、十八年度は留年した学生はわずか二名（一・九%）だったものが、平成十九年度以降は全体の約二五%に増加しました。もう一つの理由は、修業年限短縮制度を用いて修了する学生が増えていることです。医学研究科では、優れた研究業績を上げた学生については、三年あるいは三年半で修了することができるよう修了年限短縮制度を設けています。従って、春季入学で半年早く修了する学生と秋季入学



最後に、このような機会を与えてくださった分子病態病理学講座の水上教授をはじめ、お世話になりました先生方に心より御礼申し上げます。

引き続き、平成二十八年度弘前大学大学院医学研究科秋季学位記伝達式が行われました。医学研究科では秋季学位授与者が毎年コンスタントに出ています。これは以下の二つの理由が挙げられます。一つ目は、四年の修業年限内に修了できる学生が減少したことです。大学院が部局化された平成十九年度から、学位論文として提出される論文は

で一年早く修了する学生は、秋季学位記授与式で学位を授与されることとなります。今年度の医学研究科の秋季修了生は甲の三名と論文提出による乙の一名でしたが、残念ながら修了年限短縮制度を利用して卒業された方は今回はおりませんでした。論文の質を評価することは非常に難しいことですが、今回の修了生及び論文提出（乙）の学位論文はどれも素晴らしい内容であり、学位授与者の今後の活躍を期待したいと思います。今年度の秋季学位記伝達式には、四名全員が出席することが出来、若林孝一研究科長から学位記が授与されました。皆さんおめでとございました。心よりお慶び申し上げます。

弘前大学白菊会創立50周年記念講演

「献体」という言葉を知っていますか？

最後の贈り物

生体構造医科学講座 教授 下田 浩

この弘前大学医学部に篤志献体団体として白菊会が設立されて今年で半世紀が経ちました。これを機に、一般の方々に献体活動についてさらなるご理解を頂きたいとの奥田稔白菊会理事長の強い思いから、九月十五日十三時三十分より本学の基礎大講堂で記念講演会が開催されました。当日は晴天に恵まれ、白菊会会員や一般の皆様、さらには本学ご出身の諸先輩の方々まで多数の方々にご来場いただきました。講演会に先立ち、奥田理事長よりご挨拶と本学白菊会の活動についてご紹介を頂きましたのに

続き、若林孝一医学部長ならびに佐藤敬学長より会場の皆様にご挨拶と献体活動へのお言葉が述べられました。

その後、本学白菊会を設立されました河西達夫名誉教授に「弘前大学白菊会のあゆみ」についてご講演を賜り、設立当時から現在までの歴史について当時のエピソードを織り込みながらご講演頂きました。年齢を感じさせない河西先生の力強い立ち振る舞いを目の当たりにいたしますと、本学の白菊会と解剖学教室の発展に並ならぬ情熱を注いでこられたことがひしひしと感じられ、全国で六番目という速さで白菊会を築かれたという偉業が当然のことのように思われしました。非常に興味深く拝聴させて頂きましたとともに、その教室を引き継いでいる重責に改めて緊張を覚えました。次いで、篤志解剖全国連合会元会長（富山医科薬科大学名誉教授）の大谷修先生に「死後に生きるもの」と題して全国的な献体活動の推移や現状とともに、解剖学実習が医学生に残していくものについてお話し頂きました。お二人の先生とよって支えられてお



富山大学名誉教授
大谷 修 先生



弘前大学名誉教授
河西達夫 先生



生体構造医科学講座教授
下田 浩 先生



医学部コミュニケーションセンター内にて

平成28年度 医学研究科学内公開講座の開催報告 「お口の健康から全身の健康へ」

歯科口腔外科学講座 教授 小林 恒

今年度の医学研究科学内公開講座は「お口の健康から全身の健康へ」をテーマにさる九月二日、医学部コミュニケーションセンターにおいて開催され、一般市民を中心に約八十名の方々に

にお集まり頂きました。講演は内分秘代謝内科学講座の大門真教授の座長のもと、歯科口腔外科学講座の小林恒、久保田耕世と市内で開業されている梅原一浩先生

の三人が担当しました。最初の講演は小林により「口腔の健康と全身の関係―岩木健康増進プロジェクトから見えてきたもの」と題して岩木プロジェクトの検診結果から新知見として口腔内環境が全身疾患に与えている影響について紹介がありました。紹介された内容は認知機能、平衡機能、全身の筋力、嚥下機能、腎機能、睡眠といった口腔とは一見関係ないと思われることが実は口腔と密接に関係していることがわかってきたというものでした。次に



白菊会記念講演チラシ

平成28年度 医学研究科学外公開講座の開催報告 「胃・腸・肺がん―予防・早期発見と治療―」

附属病院 呼吸器内科 講師 當 麻 景 章

平成二十八年十月十五日（土）に弘前大学大学院医学研究科 健康・医療講演会「胃・腸・肺がん―予防・早期発見と治療―」が大鰐町地域交流センター鰐 come

（わにかむ）で開催されました。昨年度に引き続き、がんがテーマになりました。青森県はがん死亡率が、全国ワースト一位であり、積極的ながん予防、早期発見、治療への取り組みが重要と考えます。今年度は、なかでも死亡数が多く、増

加傾向となっている胃、大腸、肺がんを中心に講演させて頂いていただきました。はじめに、本学広報委員長の内分秘代謝内科学講座教授 大門真先生から、本会の趣旨などを含めてご挨拶を頂いたあと、講演1「胃・腸の癌について」と題して、町立大鰐病院 副院長の大川恵三先生から講演を頂きました。がん検診からその後の検査内容や、罹患した場合に行われる内視鏡を用いた治療などにつ

いて、動画を交えながらわかりやすく解説いただきました。また、大鰐病院での検査、治療内容や、二次検診の実施状況について説明され、検診受診の重要性を呼びかけました。特に胃癌に関しては、ピロリ菌との関連についての説明があり、最近、実施されているリスク検診のご案内をいただきました。

つぎに、講演2「肺の癌について」と題し、私の方からお話させて頂いたいただきました。肺がんは日本人のがん死亡原因のトップで、現在も増え続けております。治療に関しては、薬物療法の進歩が目覚ましく、従来型の抗がん剤以外にも、腫瘍の遺伝子異常に基づいて選択される分子標的治療薬や、自分の免疫を利用した免疫療法が、行われるようになっております。しかし、非常に高価な治療であることや、まだ治癒に至るような十分な成果が得られていないこと等から多くの課題をかかえているのが現状で



梅原一浩 先生



久保田耕世 先生



小林 恒 先生



大鰐町地域交流センター鰐 come 内にて

（次ページへ続く）

（前ページより）
す。やはり、最終的には禁煙などによる予防と、検診による早期発見が重要であること、具体的な数値を提示しながら解説いたしました。

農繁期の快晴ということもあってか、例年に比べ参加者数はやや少なめでしたが、熱心に聴講いただき、活発な討論が行われて盛況な会であったと思います。解散後には、個別の相談をいただいたりもしました。土曜日の午後にも関わらず、このような機会をいただいた町立大鰐病院および本学のスタッフの皆様、ご参加いただいた皆様、この場をかりて感謝申し上げます。



大門 眞先生



大川恵三先生



當麻景章先生

平成28年度 弘前大学医学部医学科 スクーリングを開催して

入試専門委員長 上野 伸哉
（脳神経生理学講座 教授）

平成二十八年度は五月十四日および八月九日の二回にわたり実施しました。第一回スクーリングの五月十四日には、三コマの講義…(1)医学部長の若林孝一先生から「弘前大学医学部の姿勢と将来性」、(2)附属病院長 福田眞作先生より「躍進を続ける弘前大学医学部附属病院」、(3)入試専門委員長 上野より「弘前大学AO入試選抜の概要及び弘前大学医学部医学科教育の概要」を行いました。第二回スクーリングの八月九日においては、四コマの講義…(1)医学部長の若林孝一



先生から「弘前大学医学部の歩みとこれから」、(2)弘前大学長の佐藤敬先生より「北日本の医学を担う諸君

へ」、(3)学務委員長 鬼島宏先生より「弘前大学医学部医学科の教育」、(4)入試専門委員長 上野より「弘前大学AO入試選抜の概要」を行った後、青森県健康福祉部より「医師修学資金貸与制度について」を紹介いただきました。



第一回および第二回のスクーリングにおいて、それぞれ百二十七名、九十二名からのアンケート回収を得ており、ほぼ例年通りの参加人数となりました。このスクーリングはAO入試（アドミッション・オフィス入試）の目的、意図を説明し、理解を得ることが目的ではありますが、同時に弘前大学医学部の歴史、使命、方針を示し、『郷土を愛す医師の育成』という目的の遂行への足がかりと考えています。五月十四日開催の第一回スクーリングでは、高校生、保護者、高校教諭の参加があり、AO入試内容への質問が多く寄せられました。八月九日開催の第二回スクーリングは、気温三十度を越え、弘前では珍しく非常に蒸し暑い日となりました。さらに基礎講義には多くの高校生および保護者でいっぱい、冷房もあまり効かない

平成28年度第2回
弘前大学医学部医学科スクーリング
「郷土を愛する医師の育成」～医師になる人材の育成・弘大AO入試～
日 時 平成28年5月14日（土）14:00～16:20
場 所 医学部附属病院大講堂
受付 13:00～14:00
講 義1 14:00～14:30
「弘前大学医学部の歩みと将来性」
医学部長 若林 孝一
講 義2 14:30～15:00
「産道を続ける弘前大学医学部附属病院」
附属病院長 福田 眞作
小休憩 15:00～15:10
講 義3 15:10～16:00
「弘前大学AO入試選抜の概要及び
弘前大学医学部医学科教育の概要」
入試専門委員長 上野 伸哉
質疑応答 16:00～16:20
お問い合わせ先：弘前大学医学部医学科アドミッション・オフィス
電話 0172-337-3204

平成28年度第1回
弘前大学医学部医学科スクーリング
「郷土を愛する医師の育成」～医師になる人材の育成・弘大AO入試～
日 時 平成28年5月14日（土）14:00～16:20
場 所 医学部附属病院大講堂
受付 13:00～14:00
講 義1 14:00～14:30
「弘前大学医学部の歩みと将来性」
医学部長 若林 孝一
講 義2 14:30～15:00
「産道を続ける弘前大学医学部附属病院」
附属病院長 福田 眞作
小休憩 15:00～15:10
講 義3 15:10～16:00
「弘前大学AO入試選抜の概要及び
弘前大学医学部医学科教育の概要」
入試専門委員長 上野 伸哉
質疑応答 16:00～16:20
お問い合わせ先：弘前大学医学部医学科アドミッション・オフィス
電話 0172-337-3204

災害医療フォーラムin東京

「病院からの全患者避難…経験から学ぶ」

胸部心臓血管外科学講座 教授 福田 幾夫

摂南大学との共同研究、「被災者のヘルスリテラシー向上を目的とした地域の医療防災ネットワークの構築」―避難所・病院・自治体・薬局をつなぐ新たな試み―（内閣府特別研究補助金・戦略的イノベーション創造プログラム）の一環として、第二回災害医療フォーラムを一橋講堂で開催しました。災害列島である日本では、病院が直接被災する危険性があり、本年四月の熊本地震では、十一の病院が使用不可能になり入院患者を避難させました。患者を避難させることは重症例では高いリスクを伴います。また、病院経営上も大きな打撃になります。今回のフォーラムでは、午前中の部では、きぬ医師会病院長の柴田先生から昨年の常総市水害で一階部分の浸水により電源消失した病院からのボートによる避難の経験をお話いただきました。小千谷病院元看護部長の佐藤先生からは二〇〇四年の新潟県中越地震で病室の壁・天井の損傷と屋上高架水槽からの漏水で全患者避難の経験と、その後の二〇〇七年新潟県中越沖地震で生かされた教訓についてお話をいただきました。いずれも電気水道などのインフラが使

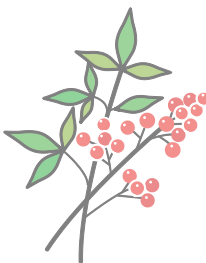


討論での講演者たち

えなくなると、病院の機能維持が困難なこと、平素の訓練が重要なこと、時間外等の発災では看護師の役割が大きいことなどが示されました。元川崎医科大学の藤井先生からは、電気回線のショートによる発煙・全館停電での大学病院の患者避難の経験をお話いただきました。リハビリ訓練室、医学部施設、体育館を使い、医学生看護学生の力も借りて速やかに避難できたことが報告されました。未熟児や妊婦については、救急車で他院に転送し、病院機能回復まで外泊しても良かった患者の移送にはタクシー会社との普段の連携が有用であったとのことでした。二〇一一年の東日本大震災で被災した南三陸町志

午後部では工学院大学建築学部久田先生から、新宿駅周辺地域における大震災時の多数傷病者発生時の対応についての問題点と取り組みについて示していただきました。新宿駅周辺では、地域住民が少なく、救護所や避難所が設置し難く、災害拠点病院に軽傷の患者や避難者が殺到する可能性があり、地域のセミナーを行って、大災害時には各ビル等の地区ごとに対応することを検討しているとのことでした。職住が離れている東京では他の駅も同様のことが起こる可能性があり、対策が急務であると感じました。また、国立保健医療科学院の金谷先生からは、広域災害に備えた災害時医療情報の共有化の検討状況について示していただきました。

災害時に被災傷病者の医療の中心になるべき病院が、被災をして機能を失う可能性があること、病院避難の決断は入院患者を守るだけでなく、医療提供の継続、さらに病院経営まで考えて行く必要があることが重い課題として討論されました。病院長はこのような重い決断を担える人になつてもらいたいというのが討論で一致した意見でした。その他にも今後の災害対応に多くの示唆を与える講演会であり、この内容は昨年の福島での講演会と合わせて出版する予定としています。



高校生外科手術体験セミナー in むつ

「蛹」

開催校 青森県立田名部高等学校

校長 三戸 延聖



外科手術体験セミナーについて、その教育効果をゲーテの言葉を引用すると「人間は、その及ぼし得る一切の影響を、その人格によって及ぼすものである。青年は最も強く青年に影響を及ぼし、そこに最も純粋な影響が生じる」(『詩と真実』第二部第十巻)がふさわしい。青年が自分の生きていくこれからの社会をどのように涉っていくべきかを考える時、先ず身近な年上の青年の存在を観察することから始まる。それは小学生が中学生を、中学生が高校生



を見て自分の近未来を予測するように彼らの思考の歴史がそのような過程を踏んでいるからである。しかし、高校から大学への進学については、思考の深さあるいは視座をこれまでの校種や学年といった全体意識から更に個である自分に問うことが求められる。喩えるとそれは蛹から蝶へと羽化する姿に重なる。守られてきた環境から外界へと飛び立つためには、自分から殻を割っていかねばいけない。おそらく蛹の内部では、さまざまな外界からの刺激によって刻々と代謝が繰り返されておき、いずれ蝶になるための準備が進んでいるのだと思うが、外観からは中の様子を窺い知ることができない。また、人間が手を触れることは、摂理を冒すことにもなりかねない。蛹の期間は個としての克己力が備わる時間であり、見守る側は成長の過程を待つ心がなくてはいけない間合いの時とも言える。

セミナーに参加している

生徒達の様子からは、一人一人の瞳の奥に湛えられた微妙な輝きを見いだすことができる。それは青年が青年に影響を受けている純粋性に由来するものだと思う。一方では、心の中で起こる化学反応に自分自身が圧倒されてしまう不安からくるのかもしれない。これまで何度か各地のセミナー会場を訪問して感ずることに、セミナーの導入・展開時と終了時とは生徒の眼差しに共通の変容がある。終了時には生徒が発する言葉も笑顔も増える。自分を解き放ち、空気が和やかに変化する感覚が会場全体を包んでいく一体感を感じることが出来る。このことは、命を預かる医師という人格から放たれる影響を青年が自らの心で受け止め、再び個から全体へ、もしくは孤独から仲間へと時が戻る感覚と言え換えてもよい。蛹の内部でやがて飛翔するための翅になる組織が形成された瞬間だとも言える。

医師を志す青年たちにとっての大きな自己を見つめる時と場を創り、継続し、県内各地で開催していただいている弘前大学医学研究科消化器外科科学講座の袴田健一先生をはじめ多くの先生方、研修医の方々、医学部在籍の学生の皆さんには本当に感謝の言葉しか見つかりません。また、毎年セミナー開催にあたり最新の医療機器を準備して協力していただいている企業の方々にはこの場をお借りして心より感謝申しあげます。今後とも大学と高等学校が心と力を合わせ、本県の医療を支える人材の育成に向けて歩みを進めていければ幸甚に思います。

平成 28 年度

実験動物慰霊式

附属動物実験施設長 上野 伸哉
(脳神経生理学講座 教授)



片平 清昭 先生



講演会の様子

本年は十月五日に動物慰霊式を開催いたしました。台風の影響も心配されましたが、幸い式の間は雨が降り出すことなく、執り行うことができ、多くの方に献花いただき感謝いたします。引き続き福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター 医療産業トランスレーショナルリサーチ動物実験分野長 片平清

結びにもう一つゲーテの箴言を添えて御礼の言葉とします。「青年は教えられるより刺激されることを欲する。」(『詩と真実』第二部第八巻)

あることの認識が広まり、三種混合およびイソフルレンを用いた吸入麻酔に移行してきました。一九五九年に Russell と Burch 氏によって提唱された世界的な動物実験の基準理念である「3Rの原則」Replacement (代替)、Reduction (削減)

私は二〇〇五年に弘前大学医学部を卒業し、二年間の初期研修を経て整形外科学講座に入局しました。現在、スポーツ整形外科を専門に診療を行っています。大学に入学した頃は、内科や外科といったメジャーな診療科かと思いつかず、自分が整形外科医になるとは思っていませんでした。しかし、学生時代にバドミントン部に所属していたこともあり、ケガや障害に次第に興味を抱きはじめていました。そして私達の学年から開始されたクリニカルラックシップで整形外科を選択したことが大きな転機になりました。次々と運ばれてくる外傷の患者さんを治したい、整形外科っておもしろい、と感じた私は整形外科医になることを決めました。

スポーツ整形外科の魅力

附属病院 整形外科 助教 木村 由佳

若手教員・医師だより



昨今、動物麻酔もほぼヒトに対する麻酔と同等の薬剤および手法が要求される時代となりました。弘前大学でも、ジエチルエーテルでの麻酔、ペントバルビタール単独での手術麻酔といったことが動物麻酔として不適切で



ISAKOS (国際関節鏡・膝・スポーツ医学会) フランス・リオンにて

ム」というテーマで学位を取得しました。膝前十字靱帯の予防に関する研究はバスケットボールやサッカーといったスポーツに焦点をあてたものが多く、バドミントンの膝外傷に関する研究を行っている人はあまりいませんでした。私は前十字靱帯損傷のメカニズムの解明とその予防について、徐々にのめり込んでいったのですが、非常に奥が深い難問であり、なかなか解決に至らないため、卒業後もライフワークとして継続することができています。「十年続ければプロになる」という十年ルールが提唱されておりありますが、あつという間に十年が過ぎようとして

(次ページへ続く)

（前ページより）
います。

現在、臨床に関してはスポーツ外来と手術を中心に診療を行っております。スポーツ外傷・障害の診断と治療はもちろんですが、それぞれの競技特性を考慮してスポーツ復帰や再発予防に重きをおいています。また休日には様々なスポーツの大会ドクターや帯同、メデイカルチェック等を行っております。スポーツドクターとしての活動は、スポーツ選手をトータルでサポートする必要があるため整形外科以外の知識も幅広く必要となります。整形外科としても、スポーツドクターとしても



いわて国体帯同時の 1 コマ

まだまだ未熟ではありますが、選手の活躍と一緒に喜んで、とやがいがいを感じることが出来ます。スポーツドクターは必ずしも、体育会系である必要はありませんので、整形外科やスポーツ医学に興味のある方は是非、整形外科教室へ立ち寄りください。

平成28年度 前期研究室研修優秀発表賞

脳血管病態学講座 教授 今 泉 忠 淳

平成二十八年度前期の「研究室研修」では、例年通り、四年次学生が医学研究科の各講座のいずれかに配属され、四月から七月まで研修を行いました。七月二十七日から二十九日の午後に基づ礎大講堂で発表会を行い、同時に優秀発表賞の審査も行いました。今回は学生一人あたりの持ち時間を六分（発表四分、質疑応答二分）とし、各発表につき三ないし四名の教員が審査を行いました。その結果を集計し、平均点の上位三名（表）が優秀発表賞に選ばれました。授賞式が十月十八

日に医学部長室で行われ、若林医学部長から三名の学生に優秀発表賞の賞状と副賞の図書カードが贈呈されました。

学生のレポートは「論文形式」としています。あちこちの講座で、学生の研修をもとに、原著論文の作成が進んでいると聞いております。論文がパブリッシュされたときの喜びを学生諸君にも体験してもらえたら、一層、実りあるものになると思います。指導教員の方々には大変な労力とありますが、論文の作成までご指導いただければ幸いです。Pub

Medに載せることがむづかしい場合には、「弘前医学」への投稿も歓迎致します。「弘前医学」は Pub Med に掲載されていませんが、Pub Med から検索できます。

今回の経験をもとに、学生諸君が初期研修終了の後には後期研修の一環として弘前大学大学院医学研究科に進学し、一度は研究に取り組んで下さることを期待しています。「博士号」は「専門医」とともにキャリア上の重要な車の両輪だと思います。

学生を受け入れ指導していただいた担当教員ならびに審査を担当して

平成28年度研究室研修優秀発表賞受賞者（指導講座）

中 山 綺 乃	（消化器血液内科学講座）
山 田 千 晴	（消化器外科学講座）
内 田 絢 子	（整形外科科学講座）

（発表順）



下さった教員の方々に、御礼申し上げます。なお、平成二十八年度の研究室研修は、カリキュラムの改訂時期にあたるため、後期には新カリキュラムの三年生を対象に開講されます。また、新カリキュラムでは、研究室研修の発表会での英語の発表をもって「医学英語Ⅲ」の単位認定を行うことになっていきます。指導教員の皆様には、ご負担をおかけしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

研究室研修優秀発表賞を受賞して

医学部医学科四年 山 田 千 晴

今回は研究室発表において優秀発表賞を頂き、大変嬉しく思っております。これもひとえに、担当教員の三浦卓也先生はじめ、消化器外科学講座の先生方の丁寧なご指導の賜であり、深く感謝申し上げます。

下部直腸癌に対する予防的ストーマ非造設肛門温存切除術後の最終ストーマ造設リスクについての臨床研

究で研修をさせていただきました。臨床研究とはどのようなものかというところから統計処理に至るまで、丁寧な教えていただき、臨床研究というものの実際に実感させていただきました。後ろ向き研究だったので、カルテや麻酔台帳からのデータの整理がメインでした。特に、電子カルテ以前に使われていた紙カルテから必

要な情報を採る作業がすごく難しかったです。カルテはほとんど日本語で書かれていると思うていましたが、英語がとても多く解読するのに苦労しました。日頃、日本語で勉強していましたが、先生方が授業で英語が大切とおっしゃっていた意味を身にしみて感じました。

や手技が、具体的にどのようなものかを見ることができて、とても印象に残っています。

今回の研究室研究を通して、臨床研究や手術見学など貴重な体験をさせていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、先生方の前で発表する機会もいただき、様々な意見をいただけたことに大変感謝しております。この受賞を励みに、英語も取り入れ、これからも一生懸命医学に取り組みたいと思います。

研究室研修優秀発表賞を受賞して

医学部医学科四年 内 田 絢 子



私は整形外科科学講座で研修をさせていただきました。研究室研修では、「脊髄損傷マウスに対する自己組織由来の間葉系幹細胞（MSC）の移植法の検討」をテーマに実験を行いました。MSCは中胚葉組織に由来する体性幹細胞で成人の骨髄、脂肪、筋肉などから分離、培養される多分化能、自己複製能を有する細胞です。

現在ES細胞やiPS細胞と並んで再生医療への応用が期待されています。これまでの基礎研究ではMSCの同種移植（Allograft）が多く、自家移植（Autograft）の研究はほとんどされていませんでした。その理由として、Autograftをするためには自己組織片を採取しなくてはならず、その後の行動評価に影響を与えてしまつたためでした。今回の研究では、侵襲性の少ない脂肪組織を単細胞と背部から採取し、その脂肪組織からMSCが培養できること、

研究室研修優秀発表賞を受賞して

医学部医学科四年 中 山 綺 乃

この度は、研究室研修優秀発表賞をいただき、大変光栄に思います。ご指導いただきました、菊池英純先生、宮澤邦昭先生、消化器血液内科学講座の先生方、心より感謝を申し上げます。今回私が発表した内容は

「あおり藍の炎症性腸疾患に対する治療効果」についてです。「あおり藍」は、青森で無農薬栽培されている藍です。その安全性、均一な品質、そして高い殺菌効果などの機能性から、大



半年間の研究室研修を通じて、先生方は、研究、実験内容から、臨床的なことまで、熱心に指導し、私がわからないことがあれば丁寧に教えてくださいました。私は、実験の意義や手順を理解した上で、実際の操作にも携わらせていただいたことで、結果について自分自身でも考えることができた。研究のきっかけをお聞きし、研究は自分の興味から始

また、他大学の先生や、青森の企業など、多くの方々の協力に研究が支えられていることを知る場面も多くありました。医学研究や「あおり藍」に寄せられる期待や影響力を感じました。臨床で働きのながら、毎日時間を作り研究に充てる先生方の姿には感動しておりました。

この研究室研修で私が学んだこと、感じたことは、およそ書ききれません。大変充実した研究室研修であり、研究の魅力を体感いたしました。このような機会を与えてくださった先生方、本当にありがとうございます。

そして脂肪組織の採取が行動評価に影響を与えないことを確認する必要があります。結果として、単細胞と背部いずれも脂肪組織の採取によって運動評価に影響を与えることはなく、単細胞の脂肪組織のほうがMuse細胞を含むMSCの培養に適していることがわかりました。

研究室では、マウスの飼育方法や手術の際の麻酔や手技、手術で使用する針の作製、標本の作製、染色、細胞培養、マウスの行動評

（次ページへ続く）

(前ページより)

価といった行程を経験することができました。研究を通して、動物を扱う難しさや研究の成果が日々の地道な作業の積み重ねに基づいているということがわかりました。私が特に苦戦したことは、標本の作製です。何とか使える標本がいくつか出来てほっとしたのをよく覚えています。実験手技以外にも、思っていた結果

と違う結果が出たときにどのように考えるのかを知ることができ、また、そういった予想外の結果が次の研究につながるっていく可能性にもなることを、身をもって経験させていただけたように思います。

最後に、いつも丁寧かつ熱心にご指導くださった新戸部先生や熊谷先生をはじめ整形外科講座の先生方に感謝いたします。

解剖学実習は、私にとって単に人体の構造に関する知識を得るための実習に留まらなかった。医師になる者としての決意をより固くする、大きな契機になったと心から感じている。

御遺骨や御献体を前に、黙祷に始まり黙祷に終わる解剖学実習は非常に厳かな雰囲気で行われた。また、その中で経験は驚きと新たな発見の連続であった。進級してすぐの四月中旬から骨学実習が始まり、実際の人の一部である御遺骨を用いての、初めての学習に身が引き締まる思いがした。標本の骨は班ごとに細かな違いがあり、骨にも個人差があることを実感し、人体の構造の多様さを漠然と思

たからこそその賜物である。解剖学実習を進めていくということは即ち、御献体の様々な部分を切り開き、組織や内臓を取り出していくことである。そのような状態になっても尚、私に様々な体の構造を見せてくれて、まるで語り掛けるように教えてくれたその姿や思いに、私は感謝の念を抱かずにはいられない。また、私はそれに、これから医師になる者としての固い意志や決意を以て応えていこうと心から思っている。

自分と一緒に実習をして、協力し合った班員の仲間や様々なアドバイスをして下さった先生方にはとても感謝している。まだまだ道は長い、この経験を糧に日々邁進していこうと思う。

約三か月間の解剖学実習を終えた今、これまでの実習期間を振り返っていきたいと思います。実習当初は、不安と興奮が入り混じった気持ちに包まれていました。というのも、部活の先輩方からは、解剖学も含めたその他専門科目の勉強、実習、そして部活と、体力的にも精神的にも疲労すると聞いていたので、自分自身が掲げている「文武両道」を成し遂げられるかという不安がありました。一方、ようやく専門科目を勉強でき、解剖実習を通して人体構造を学べるのだという高揚感もありました。そして、実習は回を重ねるごとに、最初は不慣れであったメスやピンセットの使用にも慣れていき、スムーズかつ実りある実習を行えるようになり

ました。しかし、試験期間や東医体シーズンの実習期間は、十分な予習が来ずに実習に臨んだり、睡眠不足で非効率な実習を行ったことが何回かありました。このことは、実習を終えて振り返ったときにいつも残る後悔です。実習を終えて後輩に伝えたいことは、一回一回の実習を本当に大切にしたいということだと思います。卒業後でも解剖を行うことが再びあることはほほえない程、非常に貴重な経験なので、毎回常に真剣に臨んでもらいたいです。

そして、実習を終えて忘れてはならないのは、御献体の方、そのご遺族の方々

にに対する感謝の気持ちです。御献体がなければ、私たちの解剖実習は成り立ちません。下田教授のお言葉に「御献体の方は、あなたの方の師であると共に、最初の患者さんになる方です。」、というものがありません。私が一番印象に残っている言葉です。確かに、我々は医師となって、これから多くの患者さんを治療していくことになりましたが、この約三か月間向き合ってきた御献体の方は決して忘れられない患者さんの一人となると、私は思います。

最後に、思い返せば、あつという間に過ぎてしまった実習でしたが、これを『終わり』とせず、実習を通して学んだ多くの知識をさらに躍動させていき、これからの勉強に活かしていきたい

と、思っています。

緊張でいっぱいの中迎えた解剖学実習の初日は、これから本格的に医学を学んでいく私たちが将来医師になる者として大きな覚悟を決めた日でした。解剖学実習に臨む以上、もう後戻りはできません。ご献体への感謝の思いを持ちながら、一回一回の実習を決して無駄にすることなく一生懸命に臨みました。解剖学実習への礼儀として、毎回の予習、復習、そして講義、多くの勉強をして内容を頭に入れ、毎回の実習へ臨みましたが、毎回新しい発見と教科書には載っていない身体の実態を学びました。ご献体は私たちの一番の先生となつて教科書では語りつくせない細かな身体の仕組みを教えて下さり、実習の最初から最後まで見守ってく

解剖学実習ではチームでの連携の大切さを実感しました。独りよがりでは実習を進めていくのではなくチームのみんなで実習内容を共有し、計画立てて進めていき、各々が学んだことをチームのみんなで共有しました。分からないことが生じた場合もチームのみんなで共有して、どうしたら解決することができかをチームのみんなで考えるように努めていました。この解剖学実習は、将来私たちが医師となつてチーム医療の一員として加わるための礎となるだろうと思います。今、解剖学実習を終えて、やはり一人では成し遂げることはできなかったと感じ、とても達成感があります。一緒に頑張ったチームのみんな、ご教授いただいた先生方、そして見守ってく

解剖学実習は二週間ほどで終わり、遂に人体解剖学実習が始まった。御献体を前にしての学習はより一層私の身を引き締めた。初回の実習時に剥皮しようとして御献体にメスを当てた瞬間の記憶は今でも鮮明に覚えている。そんな緊張感の中、実習が始まりました。

四月、学士編入で入学した私は、久しぶりの学生生活に戸惑う中、二十六日の執刀式を迎えました。ご遺体に触れるのは初めての経験であり、これから三か月の間うまく乗り切れるのだろうかという不安と緊張の中、実習が始まりました。

六月二十六日、白菊会員の集いに参加しました。この日は会員の方々に入会の経緯をうかがうことができました。皆さんそれぞれの人生経験から死を見つめ、医学の発展のためにご献体を決意され、そして私たちの学びの機会はこのようになつたことを実感しました。それと同時に私たちが解剖させていた先生(ご遺体)も信念を持って会員

となり、私たちの先輩方と語り合い、そして私たちが向き合ってきたこととに気が付きました。この強い期待に応えることは私たちの使命だと身を引き締めて実習に取り組みしました。教員の方々の言葉通りで質問をすればするほど先生はしっかりと答えを教示下さいました。特に印象的だったことは先生が生きてきた証がしっかりと形として体に残っていたことでした。そこから長い人生の道のりを想像し、また正常から病変へと知識の幅を広げる機会にもなりました。私たちの初めての患者さんであり、多くのことをありのままの状態で教えて下さった先生のことは生涯心に留めておきます。

解剖学実習を終えて

医学部医学科二年 真鍋光輪

解剖学実習を終えて

医学部医学科二年 倉諒登

解剖学実習を終えて

医学部医学科二年 近藤剛実

解剖学実習を終えて

医学部医学科二年 木村紗也佳



当日の様子



十月二十一日(金)二十三日(日)に行われました弘前大学総合文化祭において今年も医学展を開催致しました。天候にも恵まれ二千人を超える方々に足を運んで

また医学展特別講演としては、今年度は病理診断学講座の黒瀬頭教授、耳鼻咽喉科学講座の松原篤教授にご講話頂きました。両講演とも大変好評で、メモをとりながら熱心に耳を傾けている来場者の姿が印象的でした。

このような中でいざ試合が始まりました。教授団チームは引退試合?ということから、筆者が先発投手として

第59回 東日本医科学生体育大会夏期競技終わる

脳血管病態学講座 教授 今 泉 忠 淳

平成28年度の東日本医科学生体育大会(東医体)夏期競技は、千葉大学医学部が代表主管で、例年通り行われ、弘前大学医学部医学科からも多くの学生が参加しました。平成27年度冬季大会とあわせて、主な好成績を表に示しました。首都圏での開催ということもあり、熱中症の発生が心配されていましたが、幸い、弘前大学医学部医学科の選手にはこれといった問題も発生しなかったようです。来年の東医体は信州大学の代表主管で開催されますが、学生諸君のますますの文武両道での精進と、一層の活躍を期待しています。

平成27年度第58回東日本医科学生体育大会冬期競技の主な好成績				
スキー部	男子スーパー大回転	宇佐美真太郎(5年)	優勝	優勝
	男子回転	宇佐美真太郎(5年)	優勝	優勝
	女子スーパー大回転	高橋 茜(4年)	準優勝	準優勝
	女子大回転	高橋 茜(4年)	優勝	優勝
	女子回転	高橋 茜(4年)	優勝	優勝
	女子複合	高橋 茜(4年)	優勝	優勝

平成28年度 第59回東日本医科学生体育大会夏期競技の主な好成績				
ラグビー部				準優勝
準公式野球部				準優勝
陸上部	男子 100m	黒岩 秀(4年)	3 位	3 位
	女子 100m ハードル	伊藤 真子(5年)	準優勝	準優勝
	女子 円盤投げ	浦田 風(2年)	準優勝	準優勝
	女子 やり投げ	相沢 雪月(3年)	3 位	3 位
	男子 個人	八尾 祥吾(4年)	準優勝	準優勝
ゴルフ部				3 位
ソフトテニス部				3 位
	男子	能登 康平(3年)・廣澤 瞬(4年)組	3 位	3 位
	女子	市沢 歩美(2年)・加藤 郁(6年)組	3 位	3 位
	男子 ダブルス	桑田 大輔(6年)・小田桐直生(3年)組	3 位	3 位
卓球部	男子 団体 組手		3 位	3 位
	女子 総合		3 位	3 位
	女子 団体 組手		準優勝	準優勝
	女子 個人 組手	海老名日奈子(1年)	3 位	3 位
バスケットボール部				4 位

2016年度

総合文化祭 医学展を終えて

医学科4年 代表: 江 沙音 副代表: 石橋 尚弥、相本 興平 東 彩子

いただき、医学展が地域の方々に親しまれていることを実感した三日間でした。当日は各講座の先生のご協力、ご指導のもと、健診、外科、救急、産婦人科、臓器展示、精神、体験の七ブース、さらに保健学科展から理学、看護、検査、作業、放射線、五ブースを加えた計十二ブースがそれぞれ体験型の企画やポスター展示を行いました。来場者の方々に企画を通じて健康、医療に興味を持っていただくだけでなく、小さいお子さんや中高生が医療について面白く感じ、将来医療者を志すきっかけとなるような医学展にしたいという想いのものと、今年度は「体験」をテーマに、より手で、目で、耳で感じられる企画を増やしました。

新しく設置した体験ブースでは昨年度おくりすりブースで好評だった軟膏体験、分包機体験に加え、新たに聴診器体験、アルコールパッチテスト、食塩量展示などを行い、身近な話題から健康に興味を持っていただくブースとして準備致しました。産婦人科ブースでは、講談社のご協力のもと「コウノドリ」の複製原画を展示し、それに関連する疾患の解説ポスターを展示するという形でコウノドリをきっかけに産婦人科疾患への関心を高めるブースにしました。また、精神ブースでは新たな取り組みとして「統合失調症」をテーマに本症への理解を深めるきっかけとなるような劇を行い、三日間を通して延べ八百人の方にご覧頂きました。新企画が多く不安もありましたが、来場頂いた方からは毎年来ているが新しい企画があり楽しかった、弘前大学の医学部に入りたくなったなどの嬉しい声を頂きました。

本年も医学研究科教授団は北日本病院懇親野球大会に参加したのでご報告申し上げます。本年は、七月三十一日(日)に開始され、教授団は南塘グラウンドにおいて「ときわ会病院」と対戦しました。当日参加していただきました福田病院院長を初め大熊教授・石橋教授・上野教授・鬼島教授、そして多くの診療科の先生や事務の方々、本当にご苦勞様でした。

対戦相手の「ときわ会病院」は過去に本大会で数度優勝経験を有する強豪チームでした。また教授団では、筆者が来年退職することもあり、引退試合と銘を打って試合に臨んでいたが、個人的には感謝の念でいっぱいです。嘗て医学部基礎に在職していた頃から教授団の「助っ人」として長年参加し、時にはリリーフとして教授団の数少ない勝利?に貢献できました。当時このような職籍で教授団の選手を引退するとは思っても見なかったことも事実であります。

このように中々いざ試合が始まりました。教授団チームは引退試合?ということから、筆者が先発投手としてマウンドに立った本人は、往年の姿が未だに忘れられない心境で相手チームに立ち向かったことでした。相手チームはそのようなことなどつゆ知らず勝利に向かって情け容赦なく痛打を浴びて二回で失点を重ねリリーフを仰いだ次第です。リリーフ投手としてマウンドに上がったのは、筆者の二男であります。しかしながら以前のような投球ができず先発投手と同様連打を浴び、最終的に教授団はコールド負けとなりました。リリーフ投手は前日愛妻が長男を出産したこともあり、夜遅くまでその看護に付き添っていました。父親の最後の試合でもあることから試合に馳せ参じてくれました。しかしながら、試合の途中で無理な捕球体勢から足首を捻挫し、

即救命センター行きとなり、愛妻に教育的指導を受けようです。試合は結果的に二対十八のスコアで大敗となりましたが、長い間教授団の一員として参加させていただいた一人として、多くの教授の皆様、教授団チームを支えて下さった教員そして事務の皆様、最後にいつも選手への身の回りを世話いただいた方には、多くの楽しい思い出、そして息子と何度か同じマウンドに立って喜びをいただき、心より感謝を申し上げ、ご報告とさせていただきます。

第58回

北日本病院懇親野球大会

参加報告と御礼

医学研究科教授団 早 狩 誠 (薬剤学講座 教授)



University of Miami Miller School of Medicine を見学しつゝ

医学部医学科六年 山田 貴大

私は平成二十八年十月一日から十日間、アメリカ・フロリダ州にある University of Miami (U M) Miller School of Medicine の Lois Pope LIFE center という研究所を見学してきました。

マイアミはフロリダ東海岸南部に位置する常夏のリゾート地です。昼の気温が三〇℃程度まで上昇します。また人口の半分以上がスペイン語を話すヒスパニックで、アメリカの中にありながらラテン色の非常に濃い街です。さらに映画『Miami Vice』や『Wild Speed』などの舞台となっているこの街は、治安が悪く、地域によっては犯罪率が全米平均の二倍を超えます。車の運転が非常に荒く、『Wild Speed』張りの強引な車線変更や交差点での混雑ぶりは身の危険を感じました。

とともに、医学の奥深さを感じることができました。

旅の後半

U M は世界中から一万六千人もの学生が集まる総合大学で、広大な土地を有し、医学部である Miller Center Campus だけでも面積が東京ドーム約六個分あります。Dietrich 教授が率いる Lois Pope LIFE center は、Miami project という脊髄麻痺の治療や予防、リハビリテーションに関する大規模な研究プロジェクトが有名で、そのほか脳梗塞や脳外傷、神経変性疾患などの神経疾患の研究をしています。私は同センターで



弘前大学の陳俊輔先生が行っている、末梢神経の再生に用いる人工神経ガイドチューブの内腔にシユワン細胞を注入移植すると、軸索の再生率や機能回復率が改善するかについての研究を拝見し、マイクロサージャリーでの神経縫合手技を体験したり、動物舎などの施設を見学したりしました。医学の発展に尽力する人々の情熱を目の当たりにし、医師における研究者的視点の必要性を再認識する

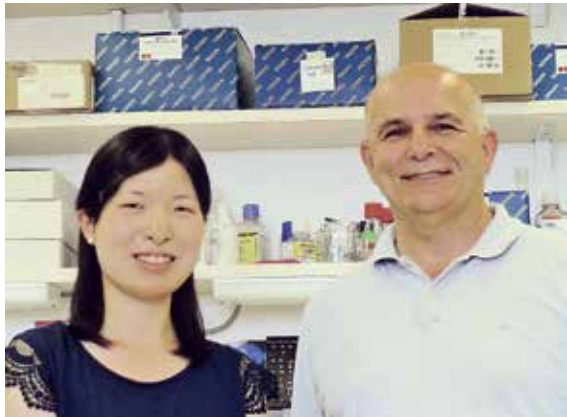
留学便り (アメリカ)

医学部医学科五年 櫛引 英恵

八月八日から八月十九日にかけて、アメリカの首都ワシントン D.C. に位置する国立衛生研究所 (National Institutes of Health) へ勉強しに行ってきました。



N I H は世界最先端の研究施設の一つであり、数多くの研究者、医学部進学や PhD を目指す学生が活躍する場所でもあります。以前、N I H で研究者として働いていた水上先生の御紹介で、スフィンゴ脂質研



究の権威である Richard L. Poda 先生の研究室を見学させて頂くことになりました。

三沢空軍病院研修感想

医学部医学科五年 岩井 美穂

八月一日〜五日までの五日間、三沢空軍病院での研修をさせて頂きました。私がこの研修を希望した理由は、一つは将来臨床で短期留学をしたいという思いがあること、学生の間に視野を広げたいという思いがあったからです。医学英単語の勉強や英語を読む方は勉強していましたが、英会話の方がとても苦手だったので不安は大きかったです。三沢に着いて空軍基地

内に入ると、雰囲気が一気に変わりそこは海外でした。私は海外に行ったことはあったのですがホームステイするのは初めてで緊張していました。ホームマザーの Susie はとても明るくて優しくすぐに仲良くなりました。Susie と友達のこと、Cristal とは焼肉やお寿司、インドカレーを食べに行ったりジムに行き運動したり夜遅くまで晩酌しながらお話ししました。また、ホー

た。研究室のテーマが普段接し慣れない基礎分野であること、言葉のこと、治安の問題など、出発直前まで不安は尽きませんでした。が、実際行ってみると桁違いな物量、人材、パワーに圧倒され、心配な気持ちにはあつた。という間に吹き飛びました。

滞在中は九時から十七時まで研究室の一角に机を借り、電子辞書片手に教科書や論文を読んで勉強したり、研究者や学生の実験を見学したりしていました。最も気がかりな問題は意思疎通がうまくできるかどうか、ということでしたが、挨拶や応酬を繰り返すうち、拙くても聞き直して、笑顔で話すことが大事なのだと改めて実感しました。スピードについていけず、やりとりの合間に何度も聞き返すこともありましたが、研究室の方々も含めて出逢った人々は皆、根気強く接してくれました。特に、大学を卒業したばかり

のほとんど年の変わらない学生たちと話す機会が多く、彼ら、彼女たちが直属の研究者たちと熱心に実験し、議論している様子には刺激を受けました。また、同じ研究室で働かれています日本人の方にはアメリカにおける研究者生活のことを教えて頂き、今後の進路について深く考えさせられました。

新たな世界に飛び込んでいくこと、未知のものに手さぐりで触れていくことは、期待や楽しみ、喜びだけではなく、時に困難を、時に嵐を伴うこともあります。それでも手を伸ばして、試み、自分の世界に受容体を増やしていくことで、将来出来ることをもっと広げていける。その挑戦という意味において、非常に充実した十日間だったと思います。

弘前大学

後援会のご案内

会長 石戸谷 忻一

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部 広報・国際課 (Tel : 0172-39-3012、E-mail : jm3012@hirosaki-u.ac.jp) までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ (<http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html>) をご覧ください。

ムマザー同士で連絡をとって下さり全員でボーリングに行ったり、最後の日にはホームパーティーをしたこともとても心に残っています。また、最後の日は年に一回しかないというスポーツデイに当たり病院もほぼ休みで空軍病院内の先生方が総勢でバスケットやバレーなどのスポーツをしていました。私たちは応援したり色んな先生と写真を撮ったりしてとても楽しかったです。私は世界中の国の人とこのように交流できることは本当に楽しいです。OSCE 形式の問診・身体診察の仕方について教えていただき、実際に練習しながらとても実践的な訓練ができました。

今回の研修を通して将来留学したいという意欲が一層高まり、何事も最初から諦めず挑戦していこうという向上心を高めることができました。このような機会を与えて下さった先生方、学務の方々本当にありがとうございました。

緊張する様子もなくとてもフレンドリーに楽しそうに話しており、医者も時折ジョークを交えながら診察していました。日本では医者がパソコンの前でにらめっこをしている形で患者さんが話しているというイメージがありとても対照的だと感じました。診察での英語はナチュラルスピードでもとても早くところどころしか聞き取れずとても歯がゆい思いをしました。英語学習への意欲を上げるよいきっかけとなりました。昼休みには英語で OSCE 形式の問診・身体診察の仕方について教えていただき、実際に練習しながらとても実践的な訓練ができました。

三沢米軍基地でのホームステイ

医学部医学科五年 小山内 智美

私はこの夏、八月八日から八月十三日まで三沢米軍基地内にてホームステイを経験してきました。実習では、Urgent care clinic, OB/GYN, Pediatrics, Mental health, Internal med / Family を見学しました。病院では多くの人が軍服で仕事していて、一目見ただけでは職種は分かりませんでした。またどの診療科でも医師は、PubMedなどで論文検索しながら診察し、そして私の質問に対して論文を用いて説明してくれました。

OB/GYNでは、妊婦健診の際に仕切りのカーテンはなく、医師と妊婦が顔を合わせるようにして診察していました。カーテンがあると何をしているのかわからず、不安だからということでしたが、少し違和感を覚えました。また、軍隊ならではの話も聞きました。診察室には通常、もしもの時の医師の逃げ道確保としてドアが二つありま

す。しかし米軍病院の診察室にはドアが一つしかなく、しかも患者側にありました。もし誰かに凶器を向けられたら医師は逃げ道を



このように貴重な機会をくださった方々に、感謝の気持ちでいっぱいです。人生初のホームステイを経験し、新しい道を見



塞がれてしまします。しかし、これは心配に及びませんでした。部屋には敏感なボタンがあり、それに触れるとセンサーが反応し、一分以内に軍隊がマシンガンなどをもって駆けつけるとのことでした。

実習後は、ホストファミリーが毎日イベントを企画してくれました。ご飯、スポーツ作り、スポーツ、映画などと、休む間もなく一緒に過ごす日々を楽しみました。また、基地内には三人の日本人医師がいました。将来アメリカで働くことを考え、今実習中のこととお話することができ、たくさん刺戟をもらいました。実習に協力してくださ

弘前市周辺のアレルギーの原因になる植物

意外と多いイネ科花粉症 カモガヤ

耳鼻咽喉科学講座 教授 松原 篤

花粉症の中で患者数が多すぎて、一番有名なのはスギ花粉症ですが、津軽地方でその次に患者数が多いのはイネ科の花粉症です。イネ科といっても、三度の食事で世話になっているお米のイネではなくて、初夏になると空き地や道端にいっぱい生えてくるカモガヤです。

カモガヤはユーラシア大陸原産の帰化植物で、英名はオーチャード・グラスといいます。オーチャード、つまり「果樹園」の名前がついていますが、世界的に有名な牧草の一つとして知られています。富国強兵が叫ばれていた明治時代に、酪農のための飼料として北海道に導入されたものが野生化し、またたく間に本州にも広がってしまっ

たものですが、大学病院の周囲や南塘グラウンドにもたくさん生えています。幸いにも、花粉の飛散距離はせいぜい数十メートルなので、カモガヤの生えている周囲でしか症状は問題になりません。以前、「外野にボールを拾いに行くとかくしゃみが出ます」と言っていた野球部の学生を調べてみたら、やっぱりカモガヤ花粉症でした。初夏に屋外スポーツをする方は、カモガヤ花粉症にはくれぐれもご注意を。



道端に生い茂るカモガヤ

三沢空軍病院研修を終えて

医学部医学科五年 恩田 郁

日本食が恋しくなった場合、に備えて隠し持っていた鮭入りおにぎりを、host familyのFitch君（二歳・ネコ）が食べてしまうという事件から始まった、異文化の中で英語漬けになる五日

.....つけることができました。また、今回この実習で出会った多くの方々にたくさん刺戟をいただきました。この出会いを大切に、これからも日々精進して参ります。素敵な出会いと、かけがえのない体験を、本当にありがとうございます。

間。この報告で三沢空軍病院での研修の魅力を少しでもお伝えできればと思います。私はPediatrics、Orthopedics、Internal Medicine、Family Practice、Mental Health、OB/GYNに伺いました。三沢空軍病院は、空軍関係者とそのご家族などが受診し、一般的な診療の他、健康問題を抱えた人が軍での勤務を続けられるかの評価も行います。日本と異なる点としては、患者さんは診察室で待つというところへ医師が入っていくこと、処方を行うP.A.: Physician Assistant



の存在などが挙げられます。文化や制度の違いはあるものの、子どもの可愛さと、元氣になった患者さんの話をするときの医師の笑顔は世界共通であると感じました。外国人の私達も優

は、英語そのものより内容を理解することが大切であるように感じます。実際、BSLで一ヶ月健診を見学していたので乳幼児健診には比較的ついていけましたし、Bag Dayの患者さんがいらつしや

たときは、内科の先生と鑑別を考えてから診察室に入ったので理解が深まりま

した。英語は昔から大好きでしたが、練習不足のまま出発日を迎えてしまい、最初はとにかく不安でした。しかし、三沢から帰ってきた今

は、英語そのものより内容を理解することが大切であるように感じます。実際、BSLで一ヶ月健診を見学していたので乳幼児健診には比較的ついていけ

私は八月一日から六日にかけて米軍三沢基地病院で実習を行いました。アメリカの医療現場で実習ができるかどうかとても不安でしたが一週間はとても楽しいものでした。実習は病院の診療時間である月から金曜の間に一日ずつ診療科をローテーションしながら実習を行いました。アメリカの病院といっても特別な病気を診るわけではなく、精神科ではうつ病を小児科では風邪な



ど日本の診療風景と変わらないものでした。先生はまず患者さんのカルテを十分確認し、問診や診察の内容を考えてから患者の待つ診

三沢留学だより

医学部医学科五年 関口 和正

察室に入ります。患者さんと話しながらカルテを書く事はなく、患者さんと目を合わせながら話に傾聴する姿勢を持っていました。大学病院でたくさん患者さんを捌く光景になれていた自分には新鮮な光景でした。

ホームステイではphysician assistantの家に宿泊させていただきました。ホストはとても優しく、一緒にトレーニングしたり夜には食事に行ったり、ボーリングで遊んだり楽しい思い出を作りました。

行く前にとっても不安だった英語力ですが医療面接のなかで使われる英語はとて

病院長の先生方はとても優しく何度も言い換えながら説明していただきました。三沢に来て日が経つと会話のテンポを乱すことなく会話できるようになりましたが、アメリカカンジョークだけはさっぱり分からず、

「What do you mean?」と言って何度もボケつぶしをしたのはとても申し訳なく思っています。(笑)

アメリカの臨床を経験してアメリカのことを学べたのはもちろん、アメリカに自分の身を置くことでまだまだ知らない日本の臨床を勉強するきっかけとなりました。このような貴重な経験をきっかけにBSL実習でも頑張っていきたいと思

三沢米軍基地病院での研修

医学部医学科五年 濱谷 智子

平成二十八年八月一日から五日間、三沢米軍基地病院にて研修させていただきました。家庭医療、小児科、産婦人科、外科／整形外科／麻酔科、救急医療を各一日ずつ回り、外来の診察や手術の見学をさせていただき、昼休みには昼食をとりながら medical interview の練習をしました。

してくれて、レジメを見ずに first contact から身体診察まで一通り行うところまでたどり着けました。たまたましいながらも、一通り行うことができて少し自信がもてるようになりました。

ホームステイに関してですが、私は放射線科医の Dr. Tolley のお宅にお世話になりました。奥さんと女の子三人の五人家族で、毎日が賑やかでもとても明るい家族でした。初日には、女の子三人が近所の子供たちを大勢引き連れてきてくれて、一緒に遊んだり、夕飯のあとにはデザートを作ってくれたりとても暖かく迎えてくれました。

くん、岩井さん、東北大からの小黒さんのホストたちにもボーリングや B B Q、パーティーに連れて行ってもらったり、帰宅後にはジムやトラックにトレーニングに行ったり、金曜日には年一回の sports day に参加したりと病院見学以外でも充実して楽しい時間を過ごすことができました。

とても短い期間でしたが、頭も体もフル回転で毎日充実していました。この経験を通して得たものを日々の実習や生活に活かしていきたいです。この研修の場を整えてくださった関係者の皆様に心から感謝しています。ありがとうございました。

約外の患者さんの診療をしているそうです。米国の医療というところと全く異なるというイメージを持っていましたが、先生方の問診や診察自体は日本とほとんど変わりありませんでした。ですので英語が多少わからなくても B S L で学んだ知識で補うことができました。問診や診察は日本よりかなり丁寧で、一人の患者さんに（初診でなくても）三十分程度はかけていました。そのかわり無駄な検査は一切せず、たとえば問診と身体診察だけで診断ができる場合は末梢血検査すらしないなど、効率重視の米国らしさを感じました。

米軍基地病院の診療は半半には終わり、あとはホストファミリーと一緒に過ごしました。ホストファミリーは Dr. Tatsumi という日系人で、ご主人と息子さんの三人家族でした。日本とは異なる食事や文化を持つことができました。

最後に、三沢米軍基地病院実習のことは入学前に読んだ医学部ウォーカーで知り、ぜひ行ってみたいと思っていたので、今回ご報告できて嬉しいです。五日間の実習期間に精神科、内科、小児科、産婦人科、救急科を一日ずつ回りました。初日の精神科に行くと、先生は開口一番「I have no patient today.」結局、精神科の薬について（もちろん英語で）講義をして頂きました。このようにして私の実習は始まりました。

二日目の内科（家庭医）は日本の総合診療医のようなもので、内科的疾患から整形外科的疾患・婦人科的

三沢米軍基地病院実習を振り返って

医学部医学科六年 山口 貴子

この研修で一番ためになったと思うことは、英語での医療面接です。基本的にはやることは日本と変わりません。最初のコミュニケーションの取り方から問診、身体診察をする際の言葉のかけ方などを英語でやり取りします。はじめはレジメを見ながら、先生が患者役となつてやってみるという形式でやりました。



今回、八月八日～十二日という短い期間でありましたが、三沢米軍基地病院実習に参加させて頂きました。三沢米軍基地実習のことは入学前に読んだ医学部ウォーカーで知り、ぜひ行ってみたいと思っていたので、今回ご報告できて嬉しいです。五日間の実習期間に精神科、内科、小児科、産婦人科、救急科を一日ずつ回りました。初日の精神科に行くと、先生は開口一番「I have no patient today.」結局、精神科の薬について（もちろん英語で）講義をして頂きました。このようにして私の実習は始まりました。

疾患なども扱っていましたが、小児科は健診が多かったのですが、中には腹痛や発熱で来院する患者さんもいました。産婦人科では、骨盤位の胎児に対する外回転術の見学をさせてもらいました。救急科は家庭医とほとんど同じですが（実際医師も兼任している）、予

米軍基地病院の診療は半半には終わり、あとはホストファミリーと一緒に過ごしました。ホストファミリーは Dr. Tatsumi という日系人で、ご主人と息子さんの三人家族でした。日本とは異なる食事や文化を持つことができました。

最後に、三沢米軍基地病院実習のことは入学前に読んだ医学部ウォーカーで知り、ぜひ行ってみたいと思っていたので、今回ご報告できて嬉しいです。五日間の実習期間に精神科、内科、小児科、産婦人科、救急科を一日ずつ回りました。初日の精神科に行くと、先生は開口一番「I have no patient today.」結局、精神科の薬について（もちろん英語で）講義をして頂きました。このようにして私の実習は始まりました。

二日目の内科（家庭医）は日本の総合診療医のようなもので、内科的疾患から整形外科的疾患・婦人科的

疾患なども扱っていましたが、小児科は健診が多かったのですが、中には腹痛や発熱で来院する患者さんもいました。産婦人科では、骨盤位の胎児に対する外回転術の見学をさせてもらいました。救急科は家庭医とほとんど同じですが（実際医師も兼任している）、予

米軍基地病院の診療は半半には終わり、あとはホストファミリーと一緒に過ごしました。ホストファミリーは Dr. Tatsumi という日系人で、ご主人と息子さんの三人家族でした。日本とは異なる食事や文化を持つことができました。



疾患なども扱っていましたが、小児科は健診が多かったのですが、中には腹痛や発熱で来院する患者さんもいました。産婦人科では、骨盤位の胎児に対する外回転術の見学をさせてもらいました。救急科は家庭医とほとんど同じですが（実際医師も兼任している）、予



泉を味わえば、一瞬にしてその躊躇もすぐに払拭される良湯です。前田屋敷温泉（第四十二湯・田舎館村前田屋敷・二十一時迄）は、前湯と同様に田舎館村福祉施設にあり、ナトリウム・塩化物泉のすっきりした湯です。平川温泉（第四十三湯・田舎館村大袋・二十二時迄）は、熱めのアルカリ性単純温泉です。短時間の入浴でも汗がたつぷり出るほど温まります。

田舎館の東に二時期建てられた津軽山辺郡（津軽四郡）には、浪岡北畠氏の浪岡城址（中世の館）があります。旧浪岡町の温泉は、茶褐色の湯が特徴的です。浪岡駅前温泉（第四十四湯・青森市浪岡・二十二時迄）は、肌すべすべ感たっぷりのアルカリ性単純温泉で、黒茶褐色の湯がかけ流されています。ポパイ温泉（第四十五湯・下十川温泉・青森市下十川・二十二時迄）は、微かなモルム臭のあるナトリウム・塩化物・炭酸水素塩で、こちらも茶褐色です。婆婆羅温泉が閉館となった今は、浪岡の湯を実感できる温泉です。

十一世紀から十七世紀津軽統一までの時代に建てられていた津軽三郡を想うと、湯歩きにも風情を感じるのは気のせいでしょうか。

泉外編その3…北海道新幹線が開業した函館近郊・道南には、素晴らしい温泉が点在しています。湯の川温泉（公衆浴場あり・泉外第八湯・函館市）をはじめ、濁川温泉（泉外第九湯・森町）や上の湯温泉（銀湯湯・泉外第十湯・八雲町）は、寒さ厳しい折に訪れると体が温まり至福の時を与えてくれます。

青森 あずまし 温泉紀行

11

鬼島 宏
(病理生命科学講座・教授)

田舎館温泉
前田屋敷温泉
平川温泉
浪岡駅前温泉
ポパイ温泉



田舎館の東に二時期建てられた津軽山辺郡（津軽四郡）には、浪岡北畠氏の浪岡城址（中世の館）があります。旧浪岡町の温泉は、茶褐色の湯が特徴的です。浪岡駅前温泉（第四十四湯・青森市浪岡・二十二時迄）は、肌すべすべ感たっぷりのアルカリ性単純温泉で、黒茶褐色の湯がかけ流されています。ポパイ温泉（第四十五湯・下十川温泉・青森市下十川・二十二時迄）は、微かなモルム臭のあるナトリウム・塩化物・炭酸水素塩で、こちらも茶褐色です。婆婆羅温泉が閉館となった今は、浪岡の湯を実感できる温泉です。

十一世紀から十七世紀津軽統一までの時代に建てられていた津軽三郡を想うと、湯歩きにも風情を感じるのは気のせいでしょうか。

泉外編その3…北海道新幹線が開業した函館近郊・道南には、素晴らしい温泉が点在しています。湯の川温泉（公衆浴場あり・泉外第八湯・函館市）をはじめ、濁川温泉（泉外第九湯・森町）や上の湯温泉（銀湯湯・泉外第十湯・八雲町）は、寒さ厳しい折に訪れると体が温まり至福の時を与えてくれます。

部活動紹介

水泳部

医学部医学科三年 石井 伯昂

弘前大学医学部水泳部は昭和二十四年（一九四九年）の設立以来、北医体、東医体、各種全国大会で数々の成績を収めてきました。今年で六十八年目を迎えた長い歴史と伝統のある部活です。水泳部の特徴と言えは何と言っても全学と一緒に活動していることです。そのため、現在医学二十九名、全学三十一名の総勢六十名が所属しており、医学部、医学部の人だけでなく、理工学部、教育学部などいろんな学部の人たちとの交流ができていつも和気あいあいとした雰囲気です。

現在、活動場所は十月、五月にはヤクルトスイミングスクール、温水プールで、六月、八月には弘前大学学園町の屋内五〇Mプールを使用して、北医体、東医体に向けて練習に励んでいます。

部員には、初心者からインカレ出場者までさまざまな人がいます。全く泳げない初心者でも全く問題ありません。先輩が丁寧な初心者指導を行いますので、一



年いや半年で四種目、一〇〇Mを泳げるようになります!! 昨年入部した一年生の初心者も四種目泳げるようになります。日々自己記録を更新しています。また、東医体で複数種目入賞した部員や、インカレに出場したことのある部員もいます。水泳経験の有無・レベルに関係なく、全員で切磋琢磨するところも水泳部の特徴です。

うになりたい人、水泳に興味がある人!!ぜひ一緒に水泳をしてみませんか?美しい筋肉を身につけませんか?全学と一緒に練習できる方、大丈夫です。初心者コース、中級者コースも常設しております。水泳に興味があるけど、泳ぐのはちょっとという方、水泳部では現在マネージャーさんが不足していて大募集しています!!興味がある方は是非一度足を運んでください!!部員一同お待ちしております。

山岳部

医学部医学科四年 中野 高晃

山を楽しむませんか。

皆さんは登山に行ったことありますか。山々に囲まれたこの青森に住んでいても登山となるとなかなか一歩を踏み出せない方も多いでしょう。しかし一言で登山と言っても、二、三時間のハイキングもあれば何日もかけて山を縦断するものもあります。また、季節や場所によって沢登り、岩登り、雪山など楽しみ方は多種多様です。山の四季折々の景色は美しく、春の雪解け、夏の新緑、秋の紅葉など下

界とは一味違う自然に包まれます。私たち医学部山岳部では週末や長期休暇を使ってその時期にあった登山を楽しんでいます。活動は主に週末、月に二

回ほど行っています。岩木山や八甲田山、白神山地のような青森を代表する山を始め、岩手山、鳥海山、秋田駒ヶ岳など広く東北の山々に登っています。参加は各個人の判断で、一年中いつでも参加することができ、また、山岳部でなくても試みに参加したいという人がいれば部員を通じて一緒に登るということもしています。夏休みや冬休みといった長期休暇では遠征も行っており、ルートバーン（ニュージラード）、宮之浦岳（屋久島）、石鎚山（四国）、白馬（北アルプス）などの縦断登山にもチャレンジしています。登山が終われば温泉につかり、食を楽しむ、現地の観光と有意義な時間を過ごせます。

医学部山岳部は三年前まで部員が三人と非常に少人数でした。しかし、『世界の果てまで行つてQ』でイモトの巻き起こした登山ブームも後押ししてか年々部員の数も増え、現在は十数名が所属しています。登山歴の豊富な学士の方もいれば、私のように大学から登山を始めたという人も多くいます。年齢や性別に関係なく楽しめるというのも山の良いところではないでしょうか。OBの先生方との繋がりも大事にしており、六年生の追い出しコンパでは先生をお呼びした食事会をしています。医師として働いている今でも登山を趣味としている先生は多く、様々な山の話の伺えます。

さて、少ばかり山に行きたくなったでしょう。私たちはいつでも皆さんの参加をお待ちしています。

グリーン・キャンパス・クラブ

医学部医学科四年 高谷 寛三郎

私たちグリーン・キャンパス・クラブは、弘前大学医学部キャンパスの一角にささやかな畑を擁し、農作業を通して部員の親睦を深める農業系のサークルです。サークルとしては十年以上の歴史があります。キャンパスの緑化を目指す環境系のサークルとして設立され、幾度かの変遷を経て現在では農業サークルとして活動しています。

主な活動内容は、育ててみたい作物を畑で育て適宜収穫して楽しむ、というも

ブームも後押ししてか年々部員の数も増え、現在は十数名が所属しています。登山歴の豊富な学士の方もいれば、私のように大学から登山を始めたという人も多くいます。年齢や性別に関係なく楽しめるというのも山の良いところではないでしょうか。OBの先生方との繋がりも大事にしており、六年生の追い出しコンパでは先生をお呼びした食事会をしています。医師として働いている今でも登山を趣味としている先生は多く、様々な山の話の伺えます。

さて、少ばかり山に行きたくなったでしょう。私たちはいつでも皆さんの参加をお待ちしています。

であることも特徴です。二〇一六年度は一年生から六年生まで合わせて五十五名の部員が所属し、学士編入生も多く在籍しています。中には県の農業試験場で働いた経験を持つ「プロ」の部員もいます。他の部やサークルと比べても人の多様性が高い集団であると言えます。このような部員の知識や経験は農作業に遺憾なく発揮されています。全国でも屈指の農業県である青森県で、医学を学びながらも伸びやかな気持ちで農業体験に勤しむ、そんな時間を過ごすことができると言えるでしょう。



グリーン・キャンパス・クラブにはユニークな特徴があります。まず、サークルとしての活動が完全に大学内に閉じたサークルであるという点です。いわゆる学外活動や他大との交流は行っておりません。これは活動内容を考えれば当然と言えるでしょう。また、比較的年配の部員が多く、落ち着いた雰囲気



形成外科学講座

形成外科学講座 教授 漆 館 聡 志



形成外科は当初皮膚科学講座内の形成外科同好会として診療にあたっており、菅原光雄先生を初代教授として、昭和五十七年四月に医学部附属病院診療科として新設されました。その後平成七年には医学部講座も新設され、今年で創立三十四年目となります。

形成外科は「体表面の先天的・後天的な変形・欠損を修復し、機能的・形態的回復をめざす外科系の分野」と定義されています。対象部位は頭部から体幹、四肢まで全身で、扱う疾患も外傷から炎症性疾患、腫瘍、先天異常まで多岐にわたります。このため当科には形成外科疾患に広く対応

できる多様性と、特定機能病院としての専門性を双方兼ね備えた医療提供が求められており、このようなニーズに対応すべく診療にあたっております。

外傷では高度救急救命センターと連携しながら重症熱傷、顔面外傷、顔面骨折などの治療をしています。特に熱傷治療では再生医療や組織工学を臨床応用した培養表皮移植、人工真皮移植や線維芽細胞増殖因子を併用した治療により救命率や治療後のQOL向上を目指しています。

皮膚軟部腫瘍においてはジャリリーの概念を取り入れ、腫瘍の根治性を担保したうえで、患者のQOLを最大限維持する治療を心がけています。特に顔面組織再建では整容的に良好な結果が得られる局所皮弁による新しい再建方法を開発し成果を上げています。

他診療科の腫瘍切除後再建では頭頸部腫瘍切除後再建を筆頭に、主にマイクロサージャリーを用いた組織移植で多くの診療科と連携しています。年々連携手術件数が増加しており、近年では乳がん切除後のエキスパンダー・インプラント再建が保険適応となったことに伴い、インプラントでの乳房再建が増加しています。

難治性潰瘍では高齢化に伴う褥瘡に加えて、最近糖尿病や末梢動脈疾患に伴う下肢の潰瘍が増加しています。下肢切断後は予後が悪化するため、切断を回避し、歩行をまもる治療が重要です。このような治療にあたっては関連各科との連携が必要となるため、今後集学的治療に向けて更に連携を強化していきたいと考えています。

また変性疾患としては加齢や外的刺激による眼瞼下垂症の治療が増加しています。このことを受けて本年度から岩木健康増進プロジェクトに参加させていただいて眼瞼下垂症に関する調査を開始いたしました。

一方、研究においては基礎研究では効果的組織移植法の開発、多血小板血漿の臨床効果の検証など臨床に直結する課題に取り組んでいます。また臨床においても顔面ユニット原理に基づく新手術法の開発、難治性潰瘍に対する治療法の開発など患者のQOL向上に直結するテーマで研究を行っています。

地域医療に関しては、常勤医のいる関連施設が少なくまだまだ十分とは言えません。非常勤で医師を派遣しておりますが、顔面外傷、熱傷などの救急疾患に

臨床検査医学講座

臨床検査医学講座 教授 萱 場 広 之

臨床検査医学講座は昭和六十二年五月二十一日に開設しました。講座の教授は、初代は工藤肇先生、二代目は保嶋実先生がを務めになり、私は三代目になります。

臨床検査医学は全医学領域をカバーしますので、研究領域もすべての医学領域に対して形成外科医がすぐに対応できない地域がまだ多くありますので、各地域の関連施設への常勤医設置を早期に実現したいと考えています。

そのためにはマンパワーの確保が不可欠ですが、幸いなことに昨年二名の後期研修医が新戦力として加入し、少しずつですが教室員が増加しています。今後も学生教育において形成外科の魅力をも十分に伝え、将来形成外科を志望する人材の発掘に努めるとともに、形成外科専門医の育成に力を入れて、臨床・研究・教育、そして地域医療にも貢献できるように努力していきたいと考えています。

最後になりますが、形成外科診療は関連各科ならびに病院スタッフのご協力無くしては成り立ちません。この場を借りて感謝申し上げます。今後ともご協力をお願い申し上げます。また何かお困りの症例がございましたらお気軽にご相談いただければ幸いです。

です。メンバーが興味を持っていて、現場で出された疑問やアイデア、検査機器の開発・改良、実務上の問題解決など全てが研究の対象になります。

現在行われている主な研究を紹介いたします。まず一つは、赤血球による Duffy 抗原親和性ケモカインの吸着と細胞内蓄積のメカニズムの研究です。赤血球にはマラリアの侵入門戸として知られた Duffy (以下、DAR C・Duffy antigen receptor for chemokines) が発現していますが、DAR Cはマラリア原虫のために作られたものではありません。DAR Cは複数のケモカインと結合し、結合したケモカインは赤血球内蓄積されていることが確認されています。しかし、その役割や蓄積のメカニズムには不明な点が多く、現在我々はそのメカニズムと赤血球内ケモカインが慢性炎症のバイオマーカーになる可能性も含めて、研究を進めています。二つ目は喘息や鼻炎などのアレルギー疾患とストレスについて検査医学、免疫学さらに心身医学など多方面から検討を加えています。ストレスの多い現代生活では、アレルギー患者の多くがストレスに晒され、症状のコントロールに影響を与えています。この課題については特に心身医学分野から注目を集めています。三つ目は、感染制御に関連



した研究です。弘前大学医学部附属病院には青森県の感染制御に従事する実務者のネットワークである青森県感染対策協議会(AI CON: Aomori Infection Control Network)の事務局が設置され、さらに検査部(細菌検査室)では、青森県の多くの医療施設の細菌検査情報を集約・分析する情報ネットワークシステム(MINA: Microbiological Information Network Aomori)を運営しています。MINAによって参加各医療施設が独自に自施設のデータ分析を行い、アンチバイオグラムを作成し、他施設との比較を行うことが可能です。AI CON業務の一環として、MINAによる県内各地域や県全域の耐性菌検出状況や薬剤感受性の動向分析結果を参加施設に年二回報告を行っています。

います。感染制御活動を通じて、感染制御の質評価に関する研究、アウトブレイク事例を通じた感染制御上のピットフォールの解析、多剤耐性菌の遺伝子解析、同定の難しい細菌の ToE、MSによる解析など、グローバルでありながら多分にローカルにも目を向けた研究が行われ、地域への貢献を行っています。四つ目は検査実務と直結した一連の研究です。現在進行中のものだけを挙げますと、心エコーによる心臓や脈管機能の研究、新たな炎症マーカーと臨床検査所見や臓器症状の関連に関する検討、情報管理に関するシステム構築、モーションキャプチャー等を駆使した採血手技の解析と自動採血装置の開発(理工学部主導の共同研究への参加)、患者負担を減らす新たな検査機器や器具の開発などです。基礎と臨床、医学と工学の橋渡しを行う検査医学には、探求を待っている宝物がどこにでも転がっています。老若男女すべての皆様を歓迎いたします。一緒にいかがですか？

K-1カレッジ2016
～大学生日本一決定トーナメント～
-55kg決勝戦に出場して
(9月19日)
医学部医学科4年 野村 優

この度、K-1カレッジ2016～大学生日本一決定トーナメント～の-55kg決勝戦に出場したことを報告させていただきます。K-1カレッジは、プロも参加可能な大学生日本一を決めるキックボクシングのトーナメントで、決勝戦は国立競技場第二体育館でプロのK-1のリングで試合を行うというものです。当時、アマチュアの全国大会で優勝していた私は他の団体でプロデビューも考えていましたが、自分の小さい頃からの夢であったキックボクシング最大のメジャー団体であるK-1に出場できる可能性があるなら人生は一回しかないので挑戦するしかないと思います、デビューを諦めてK-1カレッジ一本に絞ることにしました。九キロの減量はきつかったですが、決勝まで勝ち上がる事ができました。決勝戦は負けてしまいましたが、憧れだったK-1のリングに立つことができた最高でした。

今回の挑戦を通して私が学んだことは、本気で努力

をしていると必ず手を差し伸べてくれる方がいること、結果はついてくることです。そして、同じ舞台に立つことで世界トップのレベルを間近で感じ、このレベルに自分は一歩到達できない！強すぎる！と本気で思えたのは財産です。



以前にも数回このような番組についてテレビ局から

NHKBSプレミアム
「カラダのミシン」の取材を受けて

生体構造医学講座 教授 下田 浩



相談を受けたことがありますが、いわゆる商業的な美容をクローズアップするバラエティー番組には興味がなく、製作側の意図に沿うような意見を私が全く出さなため全て破談となりました。今回の依頼は当初「番組制作のため私のリンパ管の画像や資料を提供してほしい」とのことでしたので、それらの作品の一般向けの活用はこれまでにも新聞などで行っていたことからお引き受けしました。

しかし、その後取材や制作協力の話が持ち上がると、やはり商業主義的な結果、話題ありきの、曖昧なことを発信することはできないとする私のアカデミアとしての姿勢と番組制作の意図や方向性との間にいくつもの難しい問題が生じ、長時間にわたり番組制作を直接担当されていたSさんと電話で相談することが度々ありました。Sさんはこれまで話をしたことがある他のテレビ局の方々と違い、非常に真摯で勉強熱心な方で自分が制作会議等で厳しい立場に置かれても私の立ち位置と意見を最大限に尊重して頂き、それでも「是非とも取材に行きたい」と本学まで来られました。短い時間ではありましたが、直接色々とお話をさせて頂き、リンパ液の吸収・輸送についての実験動画とリンパ管等の画像二十点、そして私へのインタビュー動画を一つ帰られました。その間、カメラマンの方までが私のアカデミアとしての立場を気に遣っておられたのが印象に残っています。結局、実際の放送には私はほとんど出ることなく（インタビュー内容もナレーションになっていました）、短い動画と二点の画像が使われただけでしたが、放送時間の直前まで番組の編集をやられていたSさんはここで取材したものをあまり組み入れられなかったこと



いときは温め

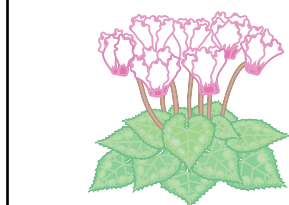
今回、社会医学講座の中



る？冷やす？というクイズ

紹介し終了しました。

前日に収録という事で安心していましたが、実際は番組を通してとるので生放送と何ら変わりなしでした。リハーサルとアドリブが違ってしまう場面が多々ありましたが、最後にディレクターから内容、時間ともに完璧でしたと言ってもらいました。翌日、教授や教室員と一緒に番組を視聴するしかありませんでした。一般の方々にわかりやすく簡単に説明し、短時間で理解してもらおうことの難しさを痛感することができ、臨床医、指導医として大変良い経験となりました。



書籍の
おしらせ

パーフェクト
人工膝関節置換術

山本 祐司
(附属病院 整形外科 講師)

人工関節置換術は、二十世紀の整形外科分野において最も発展し成功した医療技術の一つとされ、現在、本邦では年間約八万件の人工膝関節置換術が行われています。人工関節の材料やデザイン

手の整形外科医が人工膝関節置換術のエッセンスを短期間で理解できるように、豊富なイラストを交えながら編集されています。本書を通じて人工膝関節の理解が深まり、診療の向上に役立つことを心から願っています。



「ZIP-FRIDAY」に出演して

附属病院 整形外科 講師 山本 祐司

を悔いて謝っておられました。今回の件では日本リンパ学会理事長にまで大変ご迷惑をおかけいたしました。が、難しいことが多い中で出来る限り実直に自分の仕事に取り組みされている異業種の方々と僅かでも一緒に仕事をさせて頂いたことが私には何よりも嬉しい財産となりました。

今回、社会医学講座の中

る？冷やす？というクイズ

日本内視鏡外科学会監修医師向けサイト 「がん@魅せ技」に手術動画が公開されました

泌尿器科学講座 教授 大山 力



「がん@魅せ技」は、がん医療の質の向上と日本のがん医療技術のグローバルな発信を目的にバーチャル・キャンサードとして二〇〇九年十二月にスタートした、医師向けインターネット情報サービス及び、動画配信サービスです。手術を安全に遂行するための実践的情報と同時に化学療法・放射線療法を含めたがんの集学的治療情報を提供するサイトです。

特に、日本内視鏡外科学会が監修する手術動画配信サービスは、がんの手術療法に関する「名人技」を術者の解説とともに学習できるサイトです。多くの視聴者の注目を集めています。

この「がん@魅せ技」に弘大泌尿器科で担当した手術動画の配信が開始されました。公開された手術は、筋層浸潤膀胱癌と高リスク前立腺癌の二種類の癌に罹患した患者さんに対して、ロボット支援前立腺膀胱全摘除術を行い、尿路変向術

として、回腸U字型新膀胱造設術をすべて体腔内で完遂するものです。膀胱癌などで膀胱を摘除した患者さんは、膀胱の代わりに、腹部に袋を装着するのが一般的な方法ですが、当科では初代の舟生教授時代から回腸で新しい膀胱を作成して尿路を再建する術式の開発に取り組んできました。この新膀胱によって、患者さんは腹部の尿バックの煩わしさから解放され、手術前と同じような排尿を行うことができます。

する技術の開発に取り組んできました。附属病院の皆様のご理解とご支援を頂き、現在までダ・ヴィンチを使用した膀胱全摘除術を二十六例、すべての操作を体腔内で行うU字型回腸新膀胱造設術を十七例に実施し、安定した成績を得ています。膀胱全摘除術と新膀胱造設術をダ・ヴィンチで完遂することで、出血量の大幅な軽減と合併症の軽減が実現し、患者さんにとって手術の負担が大幅に軽減

ります。現在、この手術を安定して提供している施設は、国内では本院のみで、全国各地から手術見学の先生方が来院されています。これから保険収載を目指す高度医療技術ですが、このサイトに公開されたことは本手術の普及と保険収載に弾みがつくものと期待されます。

「がん@魅せ技」には医学生や医療関係者もアクセスできますので、ぜひ一度ご覧ください。

編集後記

数年来、年末になると決まって体を壊すようになった。実は本文出筆中も病気である。禁酒、禁煙など、それなりに節制しているつもりだが、寄る年波には勝てない。低空飛行人生である。「私が先生の真似やります」などど大学院生に言われ、あまりのありがたさに涙。自分が大学の時は隙あらば怠けていた。恥ずかしい。

「医学部ウォーカー第78号」(2016年9月21日発行)に関するお詫びと訂正

「医学部ウォーカー第78号」(2016年9月21日発行)の15面の研究室紹介 脳神経外科学講座の執筆者名に誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

(誤) 脳神経外科学講座 教授 大熊 洋揮
(正) 附属病院 脳神経外科 助教 奈良岡征都

(村上 記)

公益社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足(任意団体)
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会設立許可(青森県)

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようと次の事業を行っています。

- 医学教育の助成 教育活動を活性化するための支援
- 医学研究の助成 研究活動を高度化するための支援
- 地域医療振興事業の助成 地域医療に貢献するための支援
- 医学国際交流の助成 国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名 社団法人 青森医学振興会			
口 座	青森銀行 弘前支店	普通 1087485	※ 各銀行の本支店及び
	みちのく銀行 大学病院前支店	普通 0198579	ゆうちょ銀行から振込む
ゆうちょ銀行振替(旧 郵便振替)		02200-4-57580	場合は、手数料無料です。
会 費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡(電話、メール)願います。
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生	2万円	
	賛同する個人	1万円	
賛同する団体		10万円	

お問い合わせ TEL:0172(33)5111内線6519 E-mail:jm6519@hirosaki-u.ac.jp

人 事 異 動

●大学院医学研究科 人事異動

発令年月日	異動事由	所 属	職名	氏 名	備考(前職、異動先等)
H28. 9. 1	採用	オーラルヘルスケア学講座	助教	徳田 糸代	地域健康増進学講座 助教
		地域救急医療学講座	助手	新戸部 陽士郎	つがる総合病院
H28. 9.30	辞職	分子生体防御学講座	助教	叶 鵬	中国医科大学付属遼寧省腫瘍病院
H28.10. 1	採用	地域医療学講座	助手	江目 孝幸	附属病院 眼科 医員
		泌尿器科学講座	助手	今西 賢悟	つがる総合病院

●附属病院 人事異動

発令年月日	異動事由	所 属	職名	氏 名	備考(前職、異動先等)
H28. 9. 1	採用	麻酔科	助手	地主 継	琉球大学
H28. 9.30	辞職	消化器外科, 乳腺外科, 甲状腺外科	助教	中山 義人	八戸市立市民病院
		整形外科	助教	塩崎 崇	市立函館病院
		高度救命救急センター	助教	矢越 雄太	弘前市立病院
		産科婦人科	助教	千葉 仁美	青森市民病院
		脳神経外科	助教	小笠原 ゆかり	黒石市国民健康保険黒石病院
		産科婦人科	助手	淵之上 康平	国立病院機構弘前病院
		集中治療部	助手	野呂 大輔	国立病院機構弘前病院
H28.10. 1	採用	整形外科	助教	工藤 整	国立病院機構弘前病院
		産科婦人科	助教	福原 理恵	つがる総合病院
		呼吸器外科, 心臓血管外科	助手	千代谷 真理	関西医科大学枚方病院
		高度救命救急センター	助手	成田 憲紀	弘前脳卒中・リハビリテーションセンター
				島田 拓	白生会胃腸病院
				齋藤 傑	国立療養所松丘保養園
		集中治療部	助手	及川 真亮	泌尿器科学講座 助手
	配置変更	集中治療部	講師	當麻 景章	呼吸器内科 講師
			助教	田中 佳人	呼吸器内科 助教
				糸賀 正道	呼吸器内科 助教
		内分泌内科, 糖尿病代謝内科	講師	村上 宏	内分泌内科, 糖尿病代謝内科, 感染症科 講師
				柳町 幸	内分泌内科, 糖尿病代謝内科, 感染症科 講師
			助教	松木 恒太	内分泌内科, 糖尿病代謝内科, 感染症科 助教
				佐藤 江里	内分泌内科, 糖尿病代謝内科, 感染症科 助教
H28.11. 1	昇任	消化器外科, 乳腺外科, 甲状腺外科	助教	高安 忍	内分泌内科, 糖尿病代謝内科, 感染症科 助教
				対馬 悠子	内分泌内科, 糖尿病代謝内科, 感染症科 助手
		産科婦人科	講師	小笠原 紘志	高度救命救急センター 助教
				重藤 龍比古	産科婦人科学講座 助教
		総合診療部	助教	小林 只	総合診療部 助手

診療教授等新規称号付与者

称 号	氏 名	所 属	期 間
診療教授	古家 琢也	泌尿器科	平成28年10月1日～平成31年9月30日
診療講師	木村 大輔	呼吸器外科	平成28年10月1日～平成31年9月30日

臨床教授・臨床准教授称号付与者

称 号 名	氏 名	現 職 名	称号付与期間	推薦講座
臨床教授	丸山 英俊	三沢市立三沢病院 産婦人科医長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	産科婦人科学
臨床教授	森川 晶子	青森県立中央病院 産婦人科部長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	産科婦人科学
臨床准教授	長谷川 幸裕	青森県立中央病院 呼吸器内科部長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	呼吸器内科学
臨床准教授	中山 義人	八戸市立市民病院 診療局第一外科医長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	消化器外科学
臨床准教授	越後谷 直樹	弘前記念病院 副院長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	整形外科
臨床准教授	板橋 泰斗	黒石市国民健康保険黒石病院 整形外科科長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	整形外科
臨床准教授	丹藤 伴江	国立病院機構弘前病院 産婦人科部長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	産科婦人科学
臨床准教授	山口 英二	むつ総合病院 産婦人科部長	平成28年10月1日～平成31年9月30日	産科婦人科学